

へて、

『濱邊でも陸でもありません。唯一層大きな世界が空の上に劃然と浮き上つて輝いて居るのが見えるだけです。この新しい世界は今造られたばかりのやうで生物らしい者は何處にも見えません。』

そしてこの際の彼女には、自己の靈魂に新しい力が醒めて來るのを感じられたのである。

然るにアグネスが一旦ブランドの妻となつて同棲の生活に入つてから、ブランドの人類に對する愛が餘りに強烈であつて、その結果は人々に對して峻嚴なる要求となつて現はれるのを見た時に、彼女は恐れ戦き乍らも、

『貴方の高い天國へ私を導いて下さい。私の靈魂は強いが、この肉體は弱いのです。』と歎いて居る。

また二人の間に出來たアルフといふ子供を失くしてからは、一層考が内部に向ふやうになつて、ともすればその子供の生前に伴ふ楽しい記憶に耽り勝ちになり、ブランドに叱責されて、

『私の求めて居た爲事はこの弱い力では堪へ切れません。私に思ふ存分泣かせて下さい。』と怨じ、思ひ返しては、『どうぞ勘忍して下さい。私を見捨てないで後から蹤いて行かせて下さい。貴方の強い手を貸して私を導いて下さい。そして優しく優しく私を叱つて下さい。』と只管

夫に倚り頼むやうないぢらしい心になつて居る。

またある場合には、『私のあらゆる悲しみはもう諦めませう。私の夢の小さい世界で描いて居る楽しい光輝を消しませう。唯貴方の妻として、貴方ばかりに全生涯を捧げます。厳しく急ぎ立てないで私の靈魂を導いて下さい。』と願つて居る。そして遂には夫の行爲に殉じて勇敢に戦ひ乍らも、健康を害して死にゆくののである。

私は『ブランド』を手にして、このアグネスの高潔なる思想と行爲とに一掬の涙を注がずしでは讀了することが出來なかつた。そしてアグネスは女性の行き得る道を窮極まで行つた女だといふ感じがした。女性はこれ以上に出ることが出來ないのであるまいかとも思つて見た。

彼女の心的變化の跡を辿つて見ると、順當に推移して居るといふ感じがする。彼女が濱邊に佇んで眺めた世界は、普通の男性にも容易にもち得ないやうな人類に對する愛を抽象したる生々潑潑たる世界であつた。そこにブランドと緊密なる共鳴を感じたのである。然るにそれがブランドと同棲するやうになつては、夫のブランドなる一個の人格を通して、その愛が發現されるやうに變つてきた。そしてブランドを離れては、恐らくはその愛は實行に現はれる力が極めて稀薄になつたものゝ様に思はれる。

然るにブランドの理想は常に渝るところなく、始終一貫した脈をひいて行爲の上に現はれて

居る。固よりその人類に對する愛は、これを具體的に實際世界に移す時には、種々の階段を踏んで居る。ある場合には、『一切か無か』といふ儼然たる戒律となつて現はれて来る。併しその愛なる根本思想には毫も動搖するところなく、變化するところがない。

このブランドとアグネスとの愛に對する表現の差異は、私にいかなる示唆を與へるであらうか。

ブランドの愛の欲求は、普遍愛であり、絶對愛である。更に突きつめていへば抽象的の愛である。然るにアグネスの愛の欲求は、特殊愛であり、相對愛である。更に突きつめていへば具體的の愛である。この二人の見て居る世界の差異は、要するに男女兩性の見て居る世界の差異である。故に男性のもつてゐる欲求が一步を墮せば、内容の稀薄なものとなり、女性のもつて居る欲求が一步を謬れば甚だしく偏頗なものとなるのも、その源をこゝに引いて居るのだらうと思ふ。これが日常生活の上でいかに表現せられるかと見ると、男性は主として理性を働かして主智的となり、女性は重に情意を働かして感覺的になる傾きがある。

私はイブセンがその『ブランド』に於て、この問題を的確に戯曲化して提供してくれたことを極めて有難く思ふものである。(大正三年十一月)

## 世界大戦中の問題二三

### 有つべき敵

今回、日本が聯合軍側に參加して獨逸を敵に廻し、青島を陥落せしめた一事が、國家の執る外交政策として成功したものでどうかは私の知るところではない。また私の問ふところでもない。たゞある一部の論客が、かの勇猛不退轉なるゲルマン民族の頭腦に、日本に對する根強い復讐の念を鑄り込んだといふことを非常に危惧して居るのを見て、私は新興國民の一人としてそれを啜つてやりたいと思ふ。

吾等が外部に敵をもつといふことは決して憂ふべきことではない。寧ろ喜ぶべき現象である。たゞその敵が、眞に吾等の敵として價值のあるものであるかどうか問題である。その敵の所在を自覺し、彼等の長所を認識し、そして吾等の力を無限に展開せしめることは、自己の發展の上から見るも、將た國家乃至民族の發展の上から見るも、誠に有意義なことである。吾等が敵とするに足る一個の敵をもつことは、味方として頼母しからぬ、だいたい十個の味方をもつ

よりも、遙かに價値の多いことである。これは獨り吾等の外界に存する敵にのみいはるべき要求ではない。吾等の内部に存する敵——若しかゝる言葉が許さるゝとせば——に對しても、いはるべき要求である。吾々の純一生活を混濁する種々の屬性は、ある意味から見れば、吾等の眞自我の敵である。吾等の日常生活を安易なるものたらしめ、自足と妥協と屈從とを以て生活の信條とする自己心内の卑しい欲求は、吾等が永劫に生長し、盡未來に發展せむとする衷心の自己に對しては、まこと忽かせにすべからざる敵である。

かく觀來れば、吾等は内外兩面に敵をもつて居るといはねばならぬ。然もその敵は、かなり根強い底力をもつた敵である。一時の平和を貪り、寸刻の安易を樂しまむとする人々にとつては恐るべき敵であるかも知れない。しかし永久に發展することを理想として居る個人、國家乃至民族にとつては、まことに得易からざる敵である。恐るゝより先に、彼等に勝たむことを期せねばならぬ。

吾等は敵を有つ上に、先づ二つの事項を覺悟せねばならぬ。その一は、敵の本質を明瞭に知得することである。この事はやがて自己の短所と長所とを知る階段である。自己の姿を明らかに見る鏡面である。その二は、敵を屈從せしめることを努めるよりも、敵に對して優勝の地位を得むことを心掛けよといふことである。即ち敵によつてわが力を伸ばすことが第一線の爲事

であつて、敵を屈服せしめることは寧ろそれに附隨して起つて來る結果である。吾等はかゝる結果の獲得にあせるよりも、その結果をあまり重要視しない過程を重んじたいと思ふ。

固より吾々は何百千年かの將來には、眞の平和の王國が建設せらるべきを究意の理想として居る。然もそれに到達する階段としては、吾々はよい意味に於て戦はねばならぬ。よい意味に於て偉大なる敵を有つことを誇りとせねばならぬ。私は今更に、研究心に富んだ、功名心の盛んな、歩々に自國の發展を念とせるゼルマン民族を、よき敵としたわが日本帝國及び大和民族のためにその前途を祝福しようと思つてゐる。(大正三年十二月)

### 思想獨立の問題

今回の大戦亂の結果として、思想獨立の問題が思想界に喧ましく論議せられることゝなつた。これは恰も經濟界からいへば、國產獎勵の聲が盛んになつたのと同じ軌である。私はこれに就いて氣付いたことを二三言いつておきたいと思ふ。

この問題が論議せられるやうになつた動機は、固より今回の大戦亂によつて直接歐洲と思想の接觸がなくなつたにもよるのであるが、それは些細なる原因に過ぎぬ。早晚この問題は勃興

すべき筈であつたのだが、今回の大戦亂によつて偶々激成せられたまでである。

この問題の第一の要點は、從來外にのみ注がれて居た眼が、内に見開いたといふことである。外國の思想を紹介し、解説し、祖述して、其の境にのみ安住して居た從來の多くの思想家に惟らなくなつて、それより一步進めて、日本人のもつて居るものゝ實質はどうか、日本人の思想の價値は如何、日本の國民性の本質は如何といふ問題に立ち返つて來たのである。かゝる自覺は、文明史上より見るも、世界的になりつゝある民族の當然辿るべき徑路であつて、今更不思議に思ふ程のものではない。たゞこの自覺を明瞭に人々の意識に上せたといふことは、今回の大戦亂が齎らした偶然な有難き收穫である。

しかし問題は單にこの自覺一點にとゞまつて居るのではない。日本人の思想乃至國民性の本質が、果して如何なるものであるかを巨細に知悉して、それを基礎として日本人の嚮つて進むべき方向を暗指することが、重大なる責務なのである。從來とても日本の國民性を論じたものがないではなかつたが、それらはどうも一片の思ひ付きに過ぎざる觀があつた。さもなくば、たゞ表面に現はれた現象を一々羅致し來つてそれに註解を施したものに過ぎざる趣があつた。凡そ一國の國民性なるものは、しかし表面的に淺薄なものではない。また外面的な顯現を見てその中心生命を速斷し得るものではない。吾々が、燃犀なる透察力と廣大なる包容力とを兼ね

具へた偉大なる思想家の出現を所期する所以もまたこゝにある。

つぎに、思想の獨立とは、思想の孤立とは似て非なるものなることを明確に辨へておく必要がある。私は、ある一部の論客がこの二者を混同視して居るやうな傾きのあるのを見て深く憂ふるものである。獨立とは眞に自らのうちに尊きものゝ存することを自覺して、それを哺育し生長せしめて行く態度を指すのである。これには決して排他的の意味はもつて居ない。孤立とは自己のもてるものに絶對的の權威を認めて、それのみ執し、それのみ愛着して、毫も他を顧みぬ態度をいふのである。これには排他的の分子が非常に含まれて居る。今、思想の發達の經過を考へて見るのに、單獨に一の系統を成す程に偉大なる思想が生れて來た例は見ないのである。その思想が他の思想と接觸し、反撥し、融合して益々獨自性を帯び、愈々光彩を放つて來るのが、思想そのものゝ性質である。若し一部の論者の考へて居るやうに今回の大戦亂を機として、日本人の思想を世界の思想、即ち西洋の思想と隔絶して、その發展を計らうと企圖するが如きものありとすれば、それは恐るべき迷想である。嗤ふべき謬見である。

吾々はこの際、日本人自身が現在の立場を考へて、日本の國民性に醒めると同時に、西洋の思想を一層根本的に理解し、それを自己のものとする覺悟を以て進むべきことを忠告したいと思ふ。吾々は今回の大戦亂の後を承けて、益々西洋の思想と接觸し、それよりよき刺激を受け

それを眞に自己に融化し、そこより新らしき何ものかを創造すべき使命を擔つて居ることを信するものである。而してこの根本はいふ迄もなく自己にある。自國の國民性にある。この意味に於て思想の獨立を主張するものにあらざる限り、彼等のいふ思想獨立の問題は、畢竟、痴人の夢を説くに等しきものであると信するのである。(大正三年十二月)

### 戰亂國の思想家の執れる態度

今回の歐洲大戰亂の勃發に際して、私が特に留意し且つ好奇の眼を輝かしたのは、戰亂の巷となつた歐洲列國の思想家乃至藝術家が、その戰爭に對していかなる批判を下し、いかなる態度に出づべきかといふ興味深き問題であつた。それが最近になつて續々紹介せられて來たのは、誠に快心の至りである。

讀賣新聞に出た山本迷羊氏の『祖國の爲めに』を讀んでみると、獨逸の第一流の詩人、音樂者は祖國の急を救ふためにペンを抛ち、指揮棒を棄て、喜び勇んで戰場に赴いたさうである。また十二月號の『早稲田文學』の『最近思潮』欄を覗くと、いかにも興味ある報道を齎らして居る。先づ白耳義の詩人マーテルリンクは、氏獨特の人生觀から出達して今回の戰爭を非常に

嘆き、戰爭を醸成したカイゼルを非難すると同時に、その罪は獨逸國民全體が負ふべきものと痛論して、獨逸を非難して居る。そして、

獨逸人はこの世界が當然一々拒否しなければならぬ猛獸のやうな性質をもつて居る。吾々の國には責任を負ふべきものは帝王だけで、俺達は帝王のすることを無關係だといふやうな奴隸的な人間は居ない。

と罵つて居る。然るに獨逸の戯曲家ハウプトマンは獨逸の立場を辯護して、『吾々は平和を好む國民である』と稱し、

今度の戰爭は正當防禦の戰爭である。……猜疑心の多い隣邦は獨逸に鐵の輪をかけた。獨逸は呼吸すらも苦しくなつた。獨逸の起つたのはその鐵の輪を取り去らむためである。

といつて居る。同國の哲學者オイケンは、更にその筆鋒を鋭くして、英國を極度に罵倒し、英國國民のとれる主義を『獸的な國民的主我主義』なりと喝破し去り、現在の戰爭を世界の大戦亂に擴大した理由も英國が獨逸の偉大を嫉妬し恐怖したからに外ならないといつて居る。

これ等の思想家乃至藝術家のいふところを併せ考へて、最も痛切に感ずるのは、彼等の論據が常に自國民といふ立場を離れぬことである。その思想が世界的であるといはれる彼等が、かかる實際問題に衝き當つて、一樣に狭い民族といふ範圍に歸つて來るのはどういふ訣であら

う。これは將來、攻究を経ねばならぬ大問題であると思ふ。(大正三年十二月)

## 流汗記

人間の流すべき汗を流しつくし豫備兵われは愛しかりけり

熾きつくやうな太陽が大空にただ一つ懸つて居る夏の最中には、室内に居てさへ汗をかくのだ。それが炎天の下に立ち働く兵隊が汗をかくのに何も不思議はないやうだが、さて「人間の流すべき汗を流しつくす」といふ氣持を感じる程度まで汗をかくものは兵隊を除いてはさうたんとあるまい。「汗は軍人の香水」と、私等の現役時代に、大隊長はよく言つたものだが、汗を流す常人には、それらの言葉は、かなりの反感をもつて聞かれたものだ。

今度、私も豫備歩兵一等卒として勤務召集に應じ、三週間の間、殆ど汗をかき通しにかいてきた。室内八九十度の日中には、空身で戶外を歩いてさへ、ぐつしより汗をかいて着物をくたゝににしてしまふ。それが軍袴で固く身を包んで、背には二貫目もある背囊を背負ひ、肩には一貫餘の三八式歩兵銃を擔いては、整列して居るうちに、もう汗が滲んで来る。その上、八九里の行軍をするとか、三四時間の散開教練をしたとしたら、どの位汗を流すものかは大抵想像

がつくだらう。一番早く汗をかくのは胸だ。肌とシャツとの間に幾分空間があるから、さう思ふのかも知れない。それと反対に、背中には何時汗をかくのか殆ど意識しない。次には手頸だ。手頸に汗をかいて、その汗がシャツを通し、更に服に滲み出て、それが服の縫に沿ふてはつきり現はれて来る。尤もその頃には、頭からも汗がしとゞに落ちはじめる。練兵を了へて一番驚くのは、シャツが水に漬けたやうにぐつしよりになつて居ることぢやない。背中の背囊に當つた服の部分が、汗でカーキ色が變じて薄黒くなつて居ることもない。巻脚絆で締められたズボンの下半部が、流れ落つる餘地をもたない汗のために、實に美事な程に萬遍なく濕つて居ることである。しかし、まだ、汗が身體から出るうちは心配はない。その汗となつて出る水を補給出来なくなると、今度は油汗をかき、それが更に長じると、意識朦朧となつて日射病にもなるのだが、それは幸か不幸か自分には経験の無い事だから、茲に語る資格はない。

兵隊が夏で一番苦しむのは、行軍の場合を除けば、矢張り散開教練の際のやうだ。前に假設敵を控へ、それがまだどの邊に居るかも分らぬうちから(指揮官には固より分つて居るのだが)散開して、百米突位づつ停止しては前進する。敵に遠いうちは前進中も竝足、停止しても膝射の構へだから、汗が出てもさまで苦しくない。それが愈々敵に接近して四五百米突の距離になると、驅足、伏射といふ命令が下る。息がはづんで来て汗がだくく流れる。汗が雫となつて

眼に入つてかつと眼を見開くことが出来ぬやうになつても、それをハンケチなどで拭き取る餘裕はない。仕方がないから、あまり綺麗でもない服の袖で拭ふのだ。停止して伏射の姿勢になる時は、下が草地ならまだしもいゝが、赤土でもあつたら災難だ。しかし、それだといつて躊躇すべき場合でないから、ごろくゝと寝る。(かういふと將校あたりから叱言が出るかも知れぬが、この語が實際よく當れる)直ぐに敵に向つて照準はするものゝ、射つた弾丸が敵兵一人を殺して居るかどうかは、當人からは保證の限りでない。伏射になれば、汗の玉は顔を迂り落ちるやうな面倒をせずに、額から早速土に轉がり下る。それが直ちに乾いた地面に吸収されてしまうことを考へると、其時は一寸言葉に現はせない變な気分になる。さて愈々敵と三百米突の距離に接近し、ついで突撃の號令が下る頃は、半分は夢中だ。それで劍戟相摩して休戦となれば、ほつと安心の吐息もつけるが、敵兵が退却して更に追撃となると、どうして穩かではない。かういふ時こそ、『流すべき汗を流しつくし』といふ悲痛の感じが湧いて来るのである。何時かも草地在り盡きて埃の堆高い空地を敵を追撃したことがあつた。兵隊が一團となつて突進するあたりは、黄色い埃が濛々と立ち騰る。その埃が眼と言はず口と言はず、はひつて来る。演習が済んでから、お互の顔を見たら、全く見られた圖でなかつた。鼻の兩側の窪みなどには汗に塗れた埃で、埃の溝が出来て居た位だ。生きた顔色がないとは、こんな時にいふのか。笑

つて済ますには少しく大きな情景だとその時つくづく思つた。こんな散開教練の場合に、兵隊が生命から二番目に有難く思ふのは、水筒の水である。演習が一回終つて、又銃休憩となり、草に腰を据えて、食らうに息もつかず飲む水の有難さといつたらない。

水筒を逆さに傾け飲む水のこの味はひを人知るべしや

味はひと形容するのはまだ至らない。ただ嬉しい有難いである。自分は三週間の召集中に、幾度この水に感謝したことであらう。かういふ時飲む水は、少し位不純であつても身體に觸ることはない。皆汗となつて出てしまふのだ。我々が兵隊であるうちは永久に流さねばならぬ汗となつて。

さて午前の演習が終へて廠舎に戻るとする。(私は三週間のうちの十日間程は千葉縣の習志野に出張したのであつた)服とシャツとを脱いで眞裸になり、茶碗で湯(その中に飯粒などが沈んで居ても問題ぢやない)を一杯ひつかけると、その湯が何時咽喉を通つたのかも知らないのだ。驚くのは血壓の作用で肌一面に玉の汗が吹き出すことだ。今飲んだ湯が即刻に汗となつて出たのかと思はるゝ迄に。そして服とシャツとを廠舎の横手の草原に乾かしておく、草から吐く地熱と、眞向に照りつける日光とのために、ものゝ一時間も経たないうちに綺麗に乾いてしまふ。それを午後演習にまた着て出るといふやうな訣で、存外洗濯する手数は要らない。

野營間の演習が凌ぎがつくといふのも、こんな點があるからであらう。

愈々野營の豫定日数を了へて、これから夜行軍で屯營に歸るといふ際に、私は蒼茫と暮れ行く習志野原に對して感慨久しうせざるを得なかつた。我等の先輩もこゝで汗をしたゝかに流して身體を練つた。私等もまた汗を存分に流したつもりだ。これから我等の後に來べき壯丁も嘿かし汗を流すことだらう。それを思へばまことに辱けない。自らの爲めに流す汗ではない。これも何のため……………。

この原のあらむ限りをわが後も汗流すらむ人の子おもほゆ

この暑い盛りを、この『流汗記』一篇を草して讀者に見ゆる所以のもの、更にこの上、汗を流させよう爲めではない。我同胞の中にかくして汗を流して練兵にいそしんで居るものあることを紹介して、徒らに夏の日を暑い暑いと呷つ人を警しめんが爲めである。これは豫備兵の私からいふ言葉であるから、強ち泣き言とのみ聽いてくれないだらうと信ずる。

(大正六年六月、下野新聞)



## 將來の問題

現在の労働問題は、各自の精神の解放、精神の自由をその究竟目的としない限り、眞に徹底したものといふことは出来ない。概して言へば、現在の労働者は、貧しい境遇に甘んぜねばならぬところから、その精神的方面は殆ど開發されずに居り、また資本家は、その資本を有意義に運用する良心と睿智を缺いて居るところから、絶えず精神的不安にさいなまれて居る有様である。これは確かにいふ事ではない。人間が眞に人間らしい生き方をする爲めには、一刻も早くかかる状態から脱却せねばならない。しかし、現在見るが如き資本主義の時代を現出せしめたものは、決して人間の氣まぐれではなかつた。それは人間の性情に根ざしてゐる社會性と、その社會性の上に打建てられた制度から、必然的に導かれて來たものである。それ故、その發展の徑路に於ては、現在から見て間違つて居たものがあつたにせよ、その由つて來るところは甚だ遠いといはねばならぬ。それだけに現在の資本主義から當然生れて來る労働問題の根本的解決は至難なのである。恐らく現在の誰もが、その根本的解決を下し得るといふ自信はもつて

居るまいと思はれるほど、至難なのである。

私は最近に於て、その根本的解決の道を暗指して居るらしく思はれる二つの著書を読んだ。或は私の読み方が間違つて居たかも知れぬが、暗指して居るらしく思はれたのである。固より著者としては、明快に解決の道を示したつもりで書いたことゝは思ふが、私としては暗指以上の程度に出て居るとは考へられなかつた。然もその二人の著者が、かなり距つた場所にあることが、私をして益々興味を起させたのである。一は宮島新三郎君から寄贈された同君譯のカーペンタ著『民本主義の産業』であり、一は山川均氏著『社會主義者の社會觀』である。

この二著をこゝに並べ記すことは、或は識者の嗤笑を招くものかも知れぬ。併し私の乏しい讀書から見て、この二書は近來に近く有益なものであつた事は事實である。今はその二書の内容を記す餘裕はないから、労働問題の根本的解決を暗指すると思はれる點だけについていつて置く。

カーペンタは、先づ現代産業制度の弊害を指摘し、それより脱却する手段として、『藝術としての産業』を回復し、『日常生活に於ける美』を把握して『創造的生活』に入るべきことを從憑して居る。これを分り易くいへば、現在の分業制度は、各人の爲事に對する愛情を失はしめる基であるから、この愛情を回復する爲めには、爲事がもつと総合的にならねばならぬ。即

ち廣義の藝術にならねばならぬ。そしてそれが爲めには、各人が喜んで他人の爲に盡すといふ『農業的共働』に赴かねばならぬといふのである。それ故、カーペンタの理想は、精神に於て異なつて居ようが、形式に於ては昔時の小地主制度をもつと有機化したところにあるのである。之は或る意味に於ては『古への復歸』である。それでこれだけでも大凡想像のつく通り、彼は人間の精神的改造の可能性に依頼して、各自の自覺に訴へて居るのである。しかしかういふ改革は、單に各自の自覺に待つだけで現在のやうな複雑極まりなき社會制度の上に果して實現出来るであらうかどうか。彼は英國に於ける『農業的共働』の數箇の實例を擧げては居るが、これを廣く一般社會に及ぼすことが出来るかどうかは、大なる疑問と言はねばならぬ。私から言へば、彼はあまりに人間の精神的改造の可能性に信頼し過ぎて居るやうな氣がする。こゝにカーペンタの詩人的思想家たる佛が窺はれるとも言へよう。

山川均氏の『社會主義者の社會觀』は纏まつた論集ではなくて、大小幾つかの時事的評論を蒐めたものである。たゞそれらを一貫して流れてゐる思想は、唯物史觀の上に立つたものらしく、人間の思想は境遇によつて支配せられるものだといふ信念の下に、現在の産業制度を更に押し進めて、資本を労働者の共有にせねばならぬといふことを主張して居る。その手段は今は明示して居ないやうであるが、『將來の進展』に希望をつないで居る點で、氏はカーペンタと

は反對の道に立つて居る。これで見ると、氏の理想は資本家の倒壊を期するにあるらしい。それ故、氏の労働問題解決の方策は甚だ明快であるが、その改革に人間の自發的精神を殆ど認めない點で、果して圓滿に實行出来るかどうかあやぶまれるのである。

この二人の思想的大系を一身に兼ねる學者として（固より多少それが變容されて居るのはいふまでもないが）『社會問題研究』の著者なる京大の河上博士を求め得ることは、私の大いなる喜びである。尤も河上博士の思想が、或る意味に於ては不徹底だといふ非難を蒙るのも、この點になければならぬ。私一己としては、人間の精神的改造の可能性をカーペンタの如く安々と信ぜられず、さらばとて、山川氏の如く、手段を目的と觀るやうな唯物的思想にも全幅の同感を表し得ない點に於て、淡い乍ら、思想的苦悶に壓せられて居るのである。

（大正八年十二月）

## 彫刻の感味

彫刻はおなじ藝術の分派中でも一番分りにくいものにされてゐる。繪畫の面白味を感ずる程度に、彫刻に面白味を感ずる人が稀だといふ事實は、雄辯にこれを語つてゐる。

私は今、その原因を訊ねて、第一に彫刻の扱ふ題材が極めて制限されてゐることを挙げたい。假令作者の出さうとする感じは何であらうとも、その題材は十中八九分通りを人體に、残りの一二分を人間に親しみ深い動物に借りて來なければならぬ。これを、繪畫が殆ど無制限に且つ自由に、題材を選び得るに比ぶれば、そこに非常な差があることは誰しも認むる所であらう。彫刻は最初から、かういふ題材の制限を受けるものであるから、題材の興味を主にして作品を見てゆく初步の藝術鑑賞者が、彫刻を狙れ難いものとするのも強ち無理ではない。

第二に、彫刻が簡素な原始的な味ひをもつた藝術であることを挙げたい。作者が彫刻によつて出さうとする感じが、若し言語に要約出来るものとすれば、恐らく數語に盡きることであらう。そこには、繪畫や音樂に見る如き表面の複雑な情趣や官能の生理的愉快は求め得られない。

彫刻はそれらを遠く後へにして、觀者の魂——恐らく文明といふ衣の蔭に眠つて居るであらうところの——をヂカに喚び覺すところに、全的效果があるのである。これを觀者に即していへば、石や銅によつて表はされたる肉體を、たゞ單なる肉の塊と見るか、それともその肉體を通じて、作者の氣息をきき得るか、孰れかによつて、その彫刻がもつ効果は決定されるのである。

彫刻の形が一種の記號的な原始的な姿でありながら、人に與へる刺戟が不思議な魅力を持つて居る點から、或人は、彫刻を『具體的な抽象美』を表現したものだ、と言つて居る。これは彫刻が形の上より見れば具體的なものであり、内容の上より見れば抽象的なものだといふ謂であるが、よく眞諦を道破した言葉だと思ふ。これを譬へば、物の魂を抽き來つて、何等の粉飾も加へずに人の眼前に投げ出したやうなものである。その味ひが即ち簡素で原始的なのである。古代の彫刻に優秀な作品が残つて居るのも、古代人は意識せずして、自己の魂をヂカに投げ出す道を知つて居たからである。然るに現代人は文明の美酒に酔ひ痴れて官能が微細に分化して來た割合に、簡素な原始的な味に親しむ謙讓さを失つて居る。これが現代人に彫刻が分りにくいと思はせる他の原因である。(尤も、ものゝ魂といふものは、何れの時代にあつても、さう容易に理解されないものであるが)

然らば、彫刻の感味は主としてどういふところに存するのであるか、獨り彫刻に限らず、そ

れが一個の藝術品として許される以上、作者の人生批判乃至人格の影とでもいふべきものが、その作品の生命の基礎を成して居ることは勿論であるが、それらは畢竟諸藝術特殊の技方を通して具體化されたものでなくてはならない。この兩者が有機的關係に立つてこそ、初めて藝術品といはるのである。この諸藝術特殊の技方が醸し出す雰圍氣を我々は普通感味と呼んで居るのであるが、彫刻のさうした感味は果してどういふ點に存するのであるか？

我々は彫刻の感味を、普通、線の活動と表面の觸感との二つに分けて考へることが出来る。線の活動といふのは、空間を劃つた彫刻の輪廓の波動をいふのである。世間の所謂曲線美といふのがこれである。今、我々が一個の彫刻の前に立つて見るとする。そこには背後の空間に浮び上つて見える其の彫刻の輪廓の影があるに相違ない。そしてその輪廓の影が描く線は、大小長短緩急入り亂れて空から空へと連続して、人間の形なり動物の形なりを現はして来る。そこで我々は一步右なり左なりへ歩を轉じて、更らにその彫刻に眼を注ぐ時は、先の輪廓の描く線は忽ち活動を始めて別様の變化を呈して来る。この活動變化のうちに、おのづから線の波動の面白味が現はるゝ訣であるが、たゞ線が活動變化したといふだけでは意味をなさない。そこにはその線の活動に統一を與へる最も簡素な線の力が必要である。これを彫刻では、線の活動の中心を走るムウヅマン（動勢）といつて居る。彫刻が一個の藝術品となる爲めには、このム

ウヅマンが力強く動いて、然も安定して居なくてはならぬのである。

つぎに、表面の觸感とは何かといふと、彫刻が有する肉の射熱作用に起る肉感的のある感觸のことである。たゞ線の波動といふだけでは、表面的のものに過ぎぬが、今これを立體的に見て、表面に觸感が結びつくと、忽ち肉がついて来て、その彫刻は呼吸を始め、脈搏を起すのである。茲に至れば、彫刻は最早や石材や銅塊ではなくて、生命の籠つた一個の藝術品となるのである。

我々は、彫刻のうちに、作者の人生批判乃至人格の影とでもいふべきものを感得することは何等特別の教養なしに出来るのが本來であるが、事實は却々さうは行かない。況して今述べた彫刻の感味の如きは、特殊の感覺を洗鍊した上でなければ味ふことが出来ないものであるから、彫刻が一般に分りにくいとせられるも無理はないのである。

私はかう見て来て、この彫刻の感味を、短歌が有つ感味と對照してみたいと思ふのである。かうすることは必ずしも單純なる思ひつきでなくて、短歌の本質を側面から闡明する最も有效な手段だと信ずるからである。

私は嘗て、短歌に於けるすぐれた主觀の表出は、出来るだけ感動の具象的表現に俟たねばならぬといつた。（四十九頁参照）。これは恰度彫刻が、『具體的の抽象美』の表現であるといふ

命題に恰當する。私はまた歌が一般人に容易に理解されぬのは、それが一般人には兎角閑却され易い心の問題に關したものであるからだといつた。(四十六頁参照)。これは彫刻が、譬へば、物の魂を抽き來つて何等の粉飾を加へずに人の眼前に投げ出したやうなものなるが爲めに、分りにくいものにされて居るのと一般である。

さて歌の感味そのものに就ていへば、一首のうちに流るゝリズムは、彫刻に於ける線の波動に比せらるべきものである。尤も歌のリズムには、彫刻に見るが如き複雑した線の波動があるかどうかは疑問であるが、彫刻のムウヅマンに比せらるべき一種の簡素な統一的リズムが脈々と通つて居らねば、その歌はすぐれたものだといふことは出来ない。この簡素な統一的なリズムが、取りも直さず一首の歌に安らかな姿態(安定)を與へて居るのである。

つぎに我々は歌をよんで、重厚な感じ、または輕快な感じを與へられるといふ。この重厚乃至輕快な感じは、彫刻に於ける表面の感觸に比せらるべきものではなからうか。眼より來る生理的感觸が、直ちに頭腦に響く重厚感乃至輕快感と平行すべきものかどうかは、その方面の知識に全然缺乏して居る私には何とも斷言出來兼ねるが、この兩者の間には、何處かに共通する或るものが潜んで居るやうに思はれるのである。

私はこの間の院展開期中に、某彫刻家が、歌人には彫刻の味ひが最も親しい筈である、とい

つたといふ言葉を耳にした。また『ロダンの言葉』などを讀んで見ると、彫刻に就てロダンのいつた言葉が、直ちに作歌の上の用意に移されるものが一二に止まらない。これなども私には偶然とのみ思ひないのである。

最後に、私は序でなから、もう少し彫刻と歌との共通點を擧げておきたい。茲には便宜上、主として今秋の帝展からその例を取つて來るが、先づ『蛙』と題して、二人の少女が縁に腰かけて青蛙(?)を見て居る大理石像があつた。この作品は題材が甘い點と手綺麗な技工から一般人の趣好に投じたやうであつたが、歌にもかうした作はよく見受けるのである。また『地上の讚』と題して、女が兩手を擴げて今にも歩み出さうとする石膏像があつた。私はこれを作者が一種の觀念を出さうとするに急いだ失敗の作品と見たのであるが、歌にもこの種の觀念風のものがあるが、決して少ないとはいへないやうである。また薄肉彫で『高原の夕』と題して、夕日を浴びて家路に急ぐ羊の群を現はしたものがあつたが、いゝ出來だと思ひつつ、どこかに繪畫的領域を犯して居るやうに感じたのは、自然を詠んだ歌が、輒もすれば繪畫に近いと思はれるものがあるのと似通つて居る。そして近年唱道されつゝある連作歌と、ロダンの『カレーの市民』と題する群像とを想ひ起す時、質の上下は暫く論外として、そこに多分に共通した味ひを見出すものは、恐らく私一人に止まらないだらうと思ふ。(大正九年十二月)

### 精緻を極めた自然觀察

木下尙江氏著はすところの『田中正造翁』は、近頃わけても面白く且つ有益に讀んだ書物の一つである。田中正造翁と言つたゞけでは、二十代の若い人達には恐らく耳遠い言葉に響くかも知れない。然も翁と郷里を同じうし、且つ翁が渡良瀬川沿岸數十萬の農民の爲め、足尾鑛毒問題を提げて朝野の間に悪戦苦闘した明治三十年代に、傷み易い少年時代を過した私は、一生翁の名を忘れることはないであらう。若し後世社會運動史とでもいふやうな書物が書かれるとすれば、翁の名は、強く大きく記されなければならない。

木下尙江氏は、翁の晩年に師事した一人である。この書は、翁が晩年の日記數十冊を基として書かれたものださうだから、蓋し翁の眞面目を傳へて遺憾なきに庶幾しといへるであらう。私はかういふ書物が、一人にでも多く讀まれんことを衷心望んで止まぬものである。

それは兎に角、私が茲で特に言ひたいと思ふことは、この書の第十章『渡良瀬川の詩』と題する一篇に就てである。翁が明治三十三年二月、兇徒嘯集事件に座して一身の責任を感じ、二

月十五日を以て帝國議會の演壇で、進歩黨脱黨を公表し、尙議員退職の豫告をした際、木下尙江氏は毎日新聞社の編輯室にあつて衆議院擔當記者をして居たが、偶々社長島田三郎氏から、その當時世間に尙ほ明かになつて居なかつた鑛毒の實相を取調べる命令を受けた、氏はその爲め、翌日夕々、栃木縣足利郡吾妻村下羽田といふ鑛毒地の一部に向向いて、その地の老農庭田源八といふ人に遇ひ、被害前の状況や被害後の現狀に就て訊すところがあつた。その際、庭田老人は、折に觸れて書き記しておいたといふ手記を取り出して、氏の爲めに讀んで聽かせたがその手記が、木下氏の所謂『渡良瀬川の詩』なのである。この手記は四時の推移に伴ひ、渡良瀬沿岸の自然が無限に展開して見せてくれる田園の有様を、昔と今と比較して、實に微細に書きとめたもので、この書で約二十頁に亘る長篇である。固よりその文章は、技巧からいへば幼稚といふ評は免れまいが、言々句々の間に漲る一片誠實の氣は、これを讀む者を感動せしめな

いではおかない。私は今、その中から面白さうな一節を抄出して見る。

渡良瀬川沿岸は木や竹が生えてありました。洪水の砌、押し荒れの致さぬやう、右の竹木を仕立てゝありました。篠竹と申しますものは、根が深く、二間も三間も深根を張り、沿岸の爲めには至極宜敷ござりますから、人々は成る可く切らないやうに心がけ、二尺も三尺も幅が厚く、向うが見通せぬやう立ち茂つて居りました。諺に稻麻竹葦と申します

が、この篠竹、殊の外立て込んでをりまして、川船の上り下り、帆をかけて来まして、樹の音は聞えますが、船はなか／＼見えませんでした。又その向うのゆね篠竹藪の中に種々の小鳥の巢が多くありました。此の鳥の巢など、今では更にござりません。

私はこの文章を読んで、その観察が實によく行き届いて居るのに驚き、この人の自然に對して働く眼が洵におろそかならざるのに畏服した。數十年來親しんで居る田園のことだから、それは當然だと言つてしまへば、話はそれ迄である。しかし單に年月の長きを以てしたゞけで、果してこれだけ生々と自然の面貌を傳へ得るであらうか。私にはどうもさうは思はれない。私は靜かにその因つて來るところを考へて見た。そして、かゝる自然を自己の生活の一部とする人でなくば、——そしてその自己の生活に、常に愛情をもつて向つてゐる人でなくば、到底このやうな至純微妙の觀察は出来るものでないといふ結論を得た。(小作料をその生活資料とする地主階級のものに、どうしてそれが出来ようぞ)私に言はせれば、自然をよく觀るといふことは、自然に對する愛情を深めるといふ意に他ならない。自然を對象とする歌が、生活に觸れて居ないといふ非難は、自然がその人の生活の一部となつて居ない場合に於てのみ眞である。何の痴漢か、庭田老人の見る自然を以て、その生活に觸れずといふは！

現在の私には、自然を對象とする歌が、第一義的のものか否かは、もはや問題ではない。た

と愛ふるところは、庭田老人の心を以てわが心となし得るか否かにある。「田中正造翁」の一書を読み、聊か感ずる所ありて記す。(大正十一年二月)

## 潮來とつふ土地

この五月、潮來の水郷に遊ばれた窪田先生は、歸來私に語つて、潮來もいゝが餘りに土に即き過ぎて居る、自分としては、もつと山あり海ありといった趣が欲しい、その點で自分はロマンチストであるといふやうなことを言はれた。先生のこの言葉には、私が潮來が非常に好きだといふことに對する軽いアイロニツクな氣分が含んで居るらしいから、これを正面から解して、茲に兎や角言ふのは甚だ大人げない次第かも知れないが、私はこれを機會として、自分の一言を述べて見たいと思ふ。

凡そ自然景が、多くの人々の鑑賞の對象となる爲めには、人間の現實的生活氣分が稀薄なことを必要とする。これは、自然の中に身をおくことによつて、人々は平生自己が當面してゐる現實生活の壓迫から、暫らくなりとも乖離したいといふ欲求をもつて居るからである。近年日本アルプスが多くの人々を牽きつけるやうになつたのも、一つには人間の模倣性が然らしむるところとはいへ、もつと重大な原因は、我々の現實生活の間では到底求め得られない豪宕雄偉

の自然景が行く／＼展開せられて來るからのもので、そこには、我々の身體に染みついて居る現實的生活氣分といふやうなものは容易に認め得られないのである。それ故、銀座の市街を日本アルプス山中に延長するやうな昨今の盛況は、われとわが首を刎ねるやうなものである。それは兎に角、現在名所として知られて居る何處の場所を腦裡に思ひ浮べてみても、人間の現實的生活氣分の稀薄な點は、殆ど一致して居るといつてよいのである。これは餘談であるが、我々の祖先が、偉靈の神とゞまります場所として、大嶽深山を選んで來たのも、そこに詣づることによつて、須臾なりとも日常の生活氣分から遊離し、直ちに偉靈と交歡する機縁を豊かにしようとする爲めに外ならなかつたのである。

然るに潮來の水郷は、それらと大に趣を異にして居る。私は潮來の景勝のうちでは、津の宮から舟を備つて大利根を横ぎり、潮來十六島に通ずる水門の一つを脱けて、隴畝の間を走つて居る水路を經、與田の浦に出て、それから新島村（新島）の（小字）なる加藤洲（かたがは）の十二橋の下を潜り、更に北利根を眞直に突つ切つて、初めて潮來の町に着くところの、約一時間餘に亘る航路の間で眺められる田園の景色が一番勝れて居ると思ふものであるが、その航路といふのも、實は遊覽客の爲めに出來て居るものではない。況んや、我々が望見して、非常に暢々した氣分を感じ得るかによく耕された廣潤な田圃は、潮來十六島の人々にとつては、日常生活の基本となつて居る



ものであり、また所謂文人墨客が好んで題材に取つてくる加藤洲の十二橋は、隣家への交通上、餘儀なく架したものであることを考へて來る時に、何人か自分の遊覽的氣分に多少のくすぐつたさを感じないものがあらうか。それ故、五月頃、あの水路を舟で通つたところの近藤浩一路氏には、田に水上げをする爲に一心に水車を踏んで居る農夫の尻を、下から仰ぎながら通らねばならなかつたといふことが、氏のカリカチュールの好畫題ともなり得た訣である。若し潮來の景色を所謂名所といふものゝ中に加へるとすれば、これ位現實的生活氣分の濃厚なところは恐らく他にあるまいと思ふ。潮來はまことに土に即き過ぎて居る。窪田先生が私ほどに潮來に好感をもたれなかつた心理は、私には分り過ぎる程、分つて居るのである。そしてそれが爲めに先生に對する畏敬の念は加はらうとも、減することはないのである。

それでありながら、私は潮來が好きである。水によつて、現に私が住んで居る東京のざわざわした空氣から遠く隔離されて居るといふ心持以外に、深山幽谷に見るやうな自然的脅威の感じを與へない廣濶な田圃が、縦横に通じて居る水路を抱いて、遠く連なつて居る大景や、潮來界隈の人々（多くは農民であるが）の、あの土地を背景として營んで居る悠々たる日常生活が私に反射して來る現實的生活氣分とは、土にしつかと足をつけて居るといふ感じから來る心強さ、（私はこの氣持を、いかに東京の生活に於て失くして居ることであらう）と、それに伴ふし

みく／＼した落着きとを、私に齎らしてくれるからのことである。これは一方、私が百姓の子であつて、二十年近くも田園に生長して來た間に不知不識養はれた氣稟と、現在所謂中年の域に達して、少しく腰の据はつた生活を仰望して居る心持とが、兩々相俟つて、特にさういふ感を誘ふのかも知れないのである。それ故、かういふ心持は、あの土地に土著して現實生活を送つて居る人々には、洵に一顧にも値しないものだらうといふことは、私もよく承知して居る。それは恰も、日本アルプスに若し山靈ありとすれば、年々かなりな努力を拂つて山表に足跡を印するところの人々のさかしらごとを嘲り嗤ふであらうやうに。

（大正十一年十一月）

## 自然觀斷章三篇

## 若葉の姿

若葉の美しさ——私は今年ぐらゐる眼を腫つて若葉の美しさに眺め入つたことはない。昨日までよく空風の吹く中に大きく波うつて揺いでゐた櫟の枝が、今日は度ましやかに静まつて、その芽をほぐしかけてゐる。それが、人の眼にとまらぬうちに若葉に變つて行く迅速さ、私はそこに自然の巧まざる意圖を見た。

櫟の若葉は、その小枝に似て飽くまで繊細だが、こんもりと密生した姿には、どことなく落ち着いた心強さがある。をとなく日光を吸ひ込んで風にひらめく趣も忘れ難い。櫟の若葉となりきらない白ちやけた芽には、厚ほつたい感じはあるが、それで居て孤獨といったやうな寂しさがある。若葉となるのは、よほど他の樹に遅れてゐる。かなめの葉は發育し切つてしまふと、その葉面に埃をためて汚ならしい感じが誘ふが、紅味を含んだその若葉が、一齊に萌え出て、日光にきらめいてゐるのは、見るから清々しい氣持がする。

心靜かに若葉の美しさに對してゐると、日光に行つて『あらたふと青葉若葉の日のひかり』と詠んだ芭蕉の心持がよく同感される。彼の味得した法悦境が、今の私にも、しみぐと通つて來る。彼は若葉を通して自然の心に觸れたのである。

さういふ若葉のうちにも、はち切れさうな生の力が潜んで居るに違ひない。しかし表面に現はれたその姿は、飽くまで靜かである。度ましやかである。わづかな風にも、なよくと揺らぐ程のものやさしさを失はない。

私は、藝術といふものも、さういふ性質のものでないかと思ふ。裏には堪へ難い程の力の飽満があるが、其表面に現はれた姿は、どこ迄も靜謐であり敬虔である。あらはに、力——腕力といった方がよい——を感じさせるものは、藝術として未だ至らないものではあるまいか。

かう考へて來て自分の作る歌を振り返つてみると、未だ自然の趣をもつまでには多分の距離がある。私は、自分の作る歌をして Nature of itself たらしめるには、もつと苦患の道を歩まねばならぬ。例へば、かの樹木が、長い嚴冬の間を精力の充實に費して來たやうに。(大正七年五月)

## 二本の篠竹

私は生來無精ものだから、植木や草花の手入れには一向趣味を感じない方である。今の假寓の庭の植木なども、伸び放題に伸ばして構はずに打ち棄てておく。たゞ時に、私とは性癖を異にした末の弟が丹念に手入れしてくれるので、有難く思つて居るやうな訣である。

然るに、今度私は、つく／＼植物を愛護してやりたいといふ氣持が起きた。東京のやうな都會地で都會生活を營んだ人でないと分らぬかと思ふが、私の家の勝手口は、隣家の正門（といふと少し大袈裟だが）に面してついで居るやうな、變な構造に出來て居る。その正門をはひつたすぐ傍の板塀に沿うて、一叢の篠竹があつた。隣家の主人は、私と同年輩の會社員であつたが、非常に植物が好きだと見え、よく鉢植などを買つて來て楽しんで居た。

それでかの篠竹も、そのお蔭からであつたらうが、實に見事に生ひ茂つて、その葉先が私の厨から板塀越しに眺められた。私は今までそれをどんなに有難く思つたか知れない。

その篠竹は、二三年前から根を私の厨先の狭い裏庭に這はして、去年は筍が二三本出た。それを子供が何時の間にか折つたものと見え、その儘になつてしまつたが、今年もまた筍が二本程出た。私は去年に懲りて居るので、自分でも氣をつけ、妻にも注意するやうに言ひ合めたお蔭で、今度はすんなりした若竹となつて、どうやら無事に生長しさうである。

然るに、隣家の主人は氣の毒にも、數ヶ月前、ひどい胃腸病をわづらひ、と／＼なくなつ

てしまつた。それで後に残された主人の母と妻子の三人は、こゝに居る必要もなくなつたので細君の實家近くの千住の方へ引越して行つた。その後へ直ぐ引移つて來たのは、三十前後の、矢張り會社員風の人であるが、この人は先の主人と違ひ、植木などに趣味をもたぬものと見え來る匂々、庭の植木を大方引き抜き、その上、私の知らぬ間に、かの篠竹も刈り取つてしまつた。私はそれを或る朝偶然見出して非常に驚いたのであるが、唯私の僅かに慰めとなつたのは、私の裏庭へ板塀の下から延びて來て生えた二本の篠竹が、どうやらものになりさうだといふことである。それ以後、私は出來る丈けその若竹をいたはつてやつて、來年にはもつと殖やしたい氣持で居る。かの篠竹が、私の裏庭の方へ根を延ばしたお蔭で、どうやら子孫(?)の生命を取りとめたのは、何といふ自然の恩恵であらう。また何といふ自然の皮肉であらう。(大正八年六月)

### 夏夜の感

今年の舊曆八月十五夜の月は、實に近來にない名月であつた。朝からの好晴で、今夜は定めし月がいいだらうと思つて居たが、遅くも夕方迄に仕上げねばならぬ仕事をもつて居た私は、机に向つて一生懸命に筆を運ばせて居るうちに、いつか夕方になつてしまひ、不圖、窓外に眼

をやると、座敷からは見えぬが、もう月が登つたものと見え、庭の草木が瑞々しい月光に映つて、たまらない程の光澤を帯びて輝いて居た。

私はこの瞬間、甚だ古めかしい形容だが、ハッと想つて、しみじみとした氣持になつた。そして暫らくほんやりしてゐるうちに、その氣持が、昔は時々味はつたものでありながら、忙しい仕事に追はれて居る間に、いつの間にか落して來たものだといふことに氣がついた。このしみじみした氣持の回復は、今更ながら自分の周囲を改めて眺めさせる機縁となつた。そして現在の自分の生活が、甚だしくかういふ氣持を磨けるに都合のよい種類のものであつて、自分も社會の一般人と同じく、現代に奔騰する一つの大きな潮流（これを物質的の力といつてしまふのはよくないであらうが）に捲きこまれて押し流されて居ることを感じた。それと同時に、甚だつかぬ話だが、労働時間制限、乃至収入増加の爲めにむきになつて喚いて居る労働者が、いつかその希望の充たされるやうな日が來た時には（さういふ日は、恐らくすつと遠方にあることだらうが）彼等が歸つて行く心の故郷はどこにあるのだらうかと考へてみた。さうしたら、私のいふしみじみとした氣持といふやうなものが、單なる感傷的のものでないことが、はつきり分つて來た。

再び眼をあけてみると、月はだん／＼中天に登つて來たと見え、戸外は晝のやうに明るくな

り、草木は益々その輝きを増した。私は急に終へさうもない仕事を中止して、改めて外に出てみた。實にいゝ月である。その澄み切つた光は、萬物の心髓までも遍照せねば措かぬといふ程の名月である。私はこゝで、更に『かゝる良夜に遇ふ。わが一生に幾度ぞ』といふやうな月並の感慨を繰返した。（大正八年十月）

## 人生觀斷章十篇

## 托鉢僧の心

近頃よく古の托鉢僧の心持を思つて見ることもある。

古の托鉢僧は、人の門邊に立つて唱名念佛し、その代りに一椀の飯を乞ひうけ一日の生を繋いで行つたものである。托鉢僧からいへば、彼は精神的の悦樂を俗人に與へて、その報酬として物質的の施與をうけたのである。俗人からいへば、托鉢僧に精神的の悦樂をうけた。感謝の念を表はすために、彼に物質的の施與をなしたのである。兩者のその際に於ける心持は、ともに自然であつて、そこに何等作爲の痕は認められない。托鉢僧は一椀の飯を與へられたことによつて、決して自己の心持を擾さわされることなく、況してや自卑の念などは感ぜなかつたに相違ない。俗人は、一椀の飯を與へることによつて、喜悅の情を覺えこそすれ、何等恩義を施したといふ感じは抱かなかつたに相違ない。かくして彼等は喜んで與へ、喜んで受けたのである。頼朝が西行から法話を聽いた感謝の積りで、銀の猫を西行に與へたことは有名な話である。

この際の頼朝の心は固より問題とするに足らぬが、西行がその銀の猫を門前に遊んで居た子供達に直ぐ呉れてしまつたといふ行爲は、私の眼から見れば、餘りに痛快がつたやうな仕打で、少しく彼に對する畏敬の念を減じさせる。尤も西行が平氣でその銀の猫を子供達に呉れたのだとすれば、さういふ西行の心持を世人が引き下けて解釋しようとする態度が私は嫌ひなのである。

近代文明の發達に伴なつて、古の托鉢僧と俗人との間に冥々裡に流れて居た心持は、いたくも磨滅してしまつた。傭主と被傭人との關係を靜かに考へれば、さうした心持は、古の物語となつてしまつたのである。私の現在の心持は、さういふ心持とはいたくもかけ離れた悲痛の感情を味はせられるが爲めに、益々古人の心持が懐なつかしく思はれるのである。(大正六年十二月)

## 一片の愛着心

今秋の大暴風雨後の晴れた日に、月島の被害地を見て廻つての歸るさ、本願寺脇の道を通ると、路傍に掃き出された埃ちりの中に交つて、古ほけた椅子が棄てゝあつた。今迄棄てようと思つて棄て得なかつたものを、この機會に棄てたものと思はれる。冗冗らぬものに愛着をもつ人間の

心がをかしい。こんな事は、我々の思想的方面にもあることである。(大正六年十二月)

### 慾 望

いろくの関係から煙草を止めようかと思ひ立つことが屢々あるが、いつもその儘になつてしまつて、矢張り喫煙を續けてゐる。偶には決心して二三日止めるやうなことがあるが、その時の自分の氣持は、妙に humble になつて、さてはさうしてゐる自分をいぢらしくさへ思ふ。

喫煙は現在の自分に取つては、なくてはならぬ慾望である。その慾望を壓迫することも、かなり勇ましい自己鍛錬の一つの道に相違なからうが、禁煙といふことによつて、絶えず自分の心持が擾されるやうなことがあるのは堪らない。それよりも元の通り喫煙を續けて居た方が、まだしもいゝやうに思はれて、未だにこの習慣を止めずにある。

慾望を壓迫することなしに、それをよく誘導して行くことが、眞の道である。壓迫せられたる慾望は、何時かは機會があり次第、復讐を試みずにはおくまい。誘導されたる慾望は、その人をいゝ方向に育てゝ呉れる。若し將來自分が禁煙を斷行するやうな時がありとすれば、それは、禁煙によつて自分の心持が擾されぬやうな時でなければならぬ。喫煙も禁煙も、畢竟は

自分に取つて、自分の心持の上から見て、同じだといふ時でなければならぬと思ふ。

(大正七年三月)

### 氣 稟

人間のもつて生れた氣稟は、一生變るものでない。どんな境遇にあらうと、また、どんな職業に従事しよう。

それは人間の本質である。箇々の修養や境遇などの外的條件によつて、それに種々の屬性が加はり、一見改變するやうに思はれるかも知れぬが、氣稟はかたくその人の魂に根を張つてゐる。時に改變されたやうな現象を呈するのは、屬性の色彩が濃厚になつて來て、その人の本質を塗りかかしたと思はるゝ場合である。

修養といふことは、その氣稟を塗り隠すことなしに、その氣稟の本地にあふやうに、屬性の色彩を施して行くことである。これを外にして、眞の修養の道はない。

何れにしても、人の一生は、その有つて生れた氣稟の爲めに苦しまねばならぬ。(大正七年三月)

## 勇氣なきもの

クラシツクとして許されたものは、矢張り我々にいふことを教へてくれる。私はいま感謝のこゝろをもつて、ダンテの『神曲』に讀み耽つて居る。その中で、特に書きとめておかねばならぬと思ふ事の一つ。

西曆紀元千三百年、ダンテが三十五歳の折、彼は詩人ヴァーヅルに伴はれて、地獄巡りに出發した。二人が地獄門の銘を讀んで、將に地獄の第一圏内に足を踏み入れようとした時に、彼等はその圏外で實に意外なものに逢着した。それは嘆き悲しみの聲、烈しき叫喚が星なき空に響き、『異様の音、罵詈の叫び、苦患の言葉、怒の節、強き聲、弱き聲、手の響』がそれに交つて、絶えず常暗の空をめぐつて居るといふ恐ろしい光景であつた。ダンテが先づ怖えて、かゝる苦患をうけるものは誰ぞやと、ヴァーヅルに訊ねた。すると、ヴァーヅルは靜かにダンテを願みて、かう答へた。

この幸なき狀にあるは、耻もなく譽もなく世を送れるものらの悲しき魂なり  
かれらにまじりて、神に逆へるにあらず、また忠なりしにもあらず、たゞおのれにのみ頼

れるいやしき天使の族なり

天の彼等を逐へるは、其美に虧くる處なからんため、深き地獄の彼等を受けざるは、罪ある者等、これによりて誇ることなからんためなり。(地獄篇、第三曲、第三十四—第四十節)

この中で、『神に逆へるにあらず……已れにのみ頼れるいやしき天使の族』といふのは、魔王ルシファアが神に反逆を企てた際に、何れともつかぬ中立の態度をとつた天使の一群を指すのださうである。そして天がこれらの天使を逐つた理由は、彼等が天に居ると、天の圓滿なる美を缺損するが爲めで、また彼等が地獄に墜ちない理由は、もつと深い罪惡を犯したものが、これらの天使の比較的淺い罪惡を自分等のそれと比較して、自分等の罪惡を自慢させない爲めだといふのである。こゝでダンテは、更にその光景をよく注視すると、一簇の旗を翻へして須臾も歩みを止めぬ一群の後に、長い列を作つて歩いて居る澤山の人々を見出した。然もその中には、ダンテの見知り越しの人も交つて居るので、彼は、『心おくれで大事を辭めるものの魂』を知り、そして、この人達は、『神にも敵にも嫌はるゝいやしきものの宗族』だといふことをさつて、深い嘆息を洩らしたのである。

私はこの章に行き當つた時、巻を捲うて今更にわが身をふり返らざるを得なかつた。自分は地獄に墮つる程の罪惡を犯して居ないことだけは言ひ張れる。しかし天國にうけ容れられる程

の清淨な身心は有つて居ない。若し自分が死後、何處かに行かねばならぬとしたら、自分の行くところは何處であらう。恐らくはこの地獄第一圏の前まへにある圏外ではなからうか。中庸の美德を説いて居る日本在來の道徳は、固より悪いことをせよとは教へてゐるが、然も善い事をするだけの勇氣なき者に對しては、あまりに寛大な態度をとつて居るやうである。己れの信ずる事に對して決斷の勇なき者、妥協を事として徒らに儉安を貪る者、それらが如何に現在の社會に充滿してゐることであらう。自分もまたその一人に洩れぬことを衷心から恥づる。私は、ダントのこの地獄篇第三曲を正視して卒讀するに堪えぬ。それは現在の私には、あまりに荊いばらの鞭となり過ぎて居るからである。然もその荊の鞭を受けるだけの勇氣を養はずして、何處に私は眞に生きる道を求めることが出来ようか。(大正七年四月)

### 貪婪な心

四月の中頃、松村君と荒川沿岸にある志村しむらの櫻草を見に行つた。本道から田圃道にかゝると程なく荒蕪地に出た。そこで私等は草の若芽の間に隠れるやうに咲いて居る櫻草を見つけた。これが如何にもいぢらしく見えた故か、別に摘んで行かうといふ氣も起きなかつた。だんく

歩いて行つて、かなり澤山な櫻草に出逢つた時、二人は何時となくそれを摘んで居た。心のうちでは、多少氣を咎めながら。

片手に握られる位に摘みためてから、どちらからとなく、『もう止さうぢやないか?』と言ひ出した。それで、摘んだ櫻草をいたはるやうに手にもつて歩き出した。

それから少し行くと、今までよりも廣い原があつて、櫻草が一面に咲いてゐた。そこには先に行つた小學生の一團が休んで居た。生徒は一心に櫻草を摘んでは、お互に喜ばしい顔付をしてゐた。それを見ると、私等も少し大膽になつて、もつと摘んで行かうではないかと言つて、更に十數莖の櫻草を摘み加へた。少し位摘んだのでは、どこのを摘んだのかも分らない位に、櫻草が咲いて居たのも、私等を安心させる基となつた。

私等は暫らくしてそこを立ち去つた。もう櫻草は見られなかつた。さうなると、今度は寂しい氣持になつて、もつと摘んで來ればよかつたといふやうな念が起つた。

この小一時間のうちに生起した心的變化——それを振り返つてみて、私は今更に驚いた。この貪婪飽くなきこゝろ、それはいろくゝの形をとつて現はれて來た。そして最後には、つきりした姿を見せた。我々は——そして人類全體は——一生これと戦つて行かねばならぬのぢやないか。



かゝる意識にめざめた人間にとつては、この人生の姿はまことに寂しい。(大正七年五月)

### 不幸な人達

私の縁家のつゞきにUといふ醫師があつた。仙臺の醫專を卒へて郷里のU市に病院を建て、その技倆も相應の信用を博して、かなり盛んに業を営んで居たところ、この八月中に端なく激烈な腸チブスに犯された。それは何でも病家先に診察に行つたとき傳染したものであつた。この八月月中に端なく激烈な腸チブスに犯された。それは何でも病家先に診察に行つたとき傳染したものであつた。然るにその後の経過は甚だ面白くなく、入院後、回復の徴を見ることなしに、十數日程して、この病の爲めに、たうとう仆れてしまつた。

誰かも言つたやうに、不幸といふものは單獨に来るものでない。U氏の細君といふ人は、もともと虚弱な體質に生れついた人だつたが、殊にいけなかつたのは、平生心臓病をわづらつて居たことだつた。それでも二人の子の母となり、夫が腸チブスに罹つて入院する前には、既に第三子を妊娠して居た。然るにこゝに心配なことが起きたといふのは、妊娠の爲めに絶えず心臓が壓迫されて、若しこの儘に放置しておけば、或は母の一命にもかかはらうといふ危惧であつた。それで母體を救うためには、妊娠した子を流産させる策が最も當を得た處置だといふことになつて、東京の大學病院へ入院させることになつた。これはU氏が腸チブスに罹つた以前である。

母子ともに救ふことが出来なければ、せめて母だけでも救はう、U氏のこの決心は既に悲壯なものであつた。が、それにも増して細君の心中にはあきらめのつき兼ねる幽悶があつたに相違ない。二人の子もまあ無事に育つてゐるのだから、さう思つて自ら慰めたこともあつただらう。そして兎に角流産だけは無事に済んだ。しかしその爲めに細君の病勢は毫も緩和することが出来なかつた。そして今では或は肺結核の初期に達してゐるのぢやないかといふ心配も生じて來て居る。

夫の腸チブスで入院したことは、細君は病院で知つた。最初のうちは夫から手紙も來たから離れて居てもおほろながら消息だけは分つた。しかし夫の死んだことは、肉身のものが細君の病勢を募らせることを懸念して今でも秘し隠して居る。

「どうせ、いけないのだとは思ひますがね。」私にこの話をしたU氏のすぐ弟に當る人は嫂の病狀を氣にしながらかういつた。

「それでは今でもUさんの死んだことは知らない訣ですね。……夢の中で、そんなこと

を感じなかつたでせうか。』私は多少好奇心にそゝのかされて訊ねた。

『何でも兄の亡くなつた時刻(夜)兄に遇つた夢を見たさうですがね。……しかし手紙もふつ、つり来なくなつたのだから、薄々それと感づいては居るやうです。』

私は問ふべからざることを問ふたやうな心咎めがした。そしてそれ以上委しく訊ねようとはしなかつた。

この世界には實際不幸が多い。そしてそれが誰が悪いといふ訣ではない。或は我々がかうやつて肉體を享けて生れて來たことが悪いかも知れぬ。私はこの事を思ふ毎に、釋迦とか基督とかいふ人達がこの事實にめざめたことを意味あることと思ひ、有難いことと感謝して居るものである。

私は此頃、残されたる經文や聖書の各ラインの間に、血の噴くやうなこの偉大なる眞理をよみ能はぬものは、ほんとうの読み方をして居るものではないといふやうに考へて居る。

(大正七年十一月)

### 恐ろしい眞實

露國全土があゝの恐ろしい革命の渦に捲きこまれた間に在つて、雄々しく彼の地に踏み止まり、一時はその生死の程も氣遣はれた莫斯科駐在の熊崎領事は、今回の休戰條約締結を機として彼の地を引き揚げ、十二月十一日未明横濱着の加茂丸で無事歸朝せられた。その際、新聞記者に語つた同氏の談話なるものは、まのあたり彼の地の慘狀を目撃せられた人の實見談として、我々には容易に見過し難い眞實性に富んだものであつた。少し長くなるが茲にその主要なる部分を摘載させて貰ふ。

彼の國の食糧缺乏は言外で、一斤の黒パンの粉が邦價十六七圓で密賣買し、政府が市民に供給する粉は、一人に對し一斤の八分の一と定められてゐるもので、一週間に一度しか與へられないので、自分は先を見越して波斯米を買込んでおいたから、幸ひ米を食つて生きて居られたが、露國民は實に惨めなもので、本年冬期は飢餓と寒氣により以上の慘狀を呈するだらうが、生産上交通上組織は根柢から覆へされた現狀にあれば、容易に之が救済の途はない。されば生を享ける上に於て、人道上の重大問題である。又流石華麗を以て世界に誇つたペトログラードなどは荒れすさんで、市街には草生ひ茂り、冬宮を望んだ時などは、實に感慨無量であつた。一日死んだやうな露都の街を歩いた時、一人の兒童が瘦せ衰へた馬に、路傍に生ひ茂つた草を摘んで餌に與へて居たが、其翌日復其處を通つた時、昨

日の馬は斃れて、然も首がチョン切られ、腿の肉は抉られてゐた。多分餓えた市民の餌となつたのだが、是程現實暴露の悲哀を感じたことはない。云々。(十二月十二日東京朝日新聞所載)

私はこの談話に就いて兎や角と理窟はいひたくないが、讀んでゆきながら、あのトルストイが臨終の際に周囲の人達にいつたと傳へられる言葉、『この世の中には苦しんで居る人が多いのに、お前等は何故俺一人のことを構つて居るのか。』といふ言葉を思ひ起した。私は今この原稿を、冬の日の温とく射す八疊の間で片手を火鉢にかざしながら書いて居るのであるが、かういふ間にも、かの陰惨な凍雲に鎖された露土では、幾千萬といふ人達が一片のパンを獲る爲めに命掛けになつて騒いで居るのではないか。それをおもへば實際餘所事でないといふ氣がする。

さらにまた、領事が街上の行きすりに目撃したといふ瘦馬に草を與へて居た子供の話を讀んだ時に、私の眼はわれ知らずうるんで來た。そして心は驚く程シーンと静まり返つてしまつた。平生の生温い生活のために埃のついたやうな感じのする私のこゝろは一挿話のためにすつかり洗ひ淨められてしまつた。たしかドストイェフスキーの『罪と罰』の中であつたかと思ふが、これと寸分違はぬ光景が描かれてあつた。かうした子供の純無垢な心に對しては全く頭が下つ

てしまふ。これは決して感傷的な氣分からではない。有つて生れた本然の心の要求からである。これあるが爲めに、我々の生は濟はれて居るのであるといつてもいい。

そしてその後この瘦馬に加へられたる飢ゑたる人々の仕打に對しては、私はたゞ戰慄を禁じ得ぬものである。私は彼等の仕打を毫も非難する氣にはなれない。子供の純無垢なこゝろに涙を誘はれる私も、彼等と同じ境遇におかれれば、或はさうした慘虐もなし兼ねないからである。子供の行ひにも飢ゑた人達の仕打ちにも、眞實がこもつて居る。恐るべき眞實がこもつて居る。この、どうとも爲難い眞實をどうかしようといふところから、ほんとの宗教が生れ、ほんとの文藝が生れて來るのではないだらうか。(大正七年十二月)

### 山芋掘りの話

この間、母の葬儀で郷里に歸つて居る間にきいた話である。かういふ話はそれをきく人の心持次第で素直にも受けいれられるし、またその反對に、反感の伴ひ易いものであるが、私はいま敬虔な心持でそれを語らうとするのである。

私の郷里の村に十七八歳の一青年がある。家は固より農業をやつて居るのであるが、あまり

田地をもつて居ぬので、一身をあけて家の手傳ひをする程の必要を見ない。そんな關係で、この青年は幼ない時から爲事の暇を見ては山の芋を掘つたり、魚をとつたりすることに興味をもつて居た。それが現在ではこの方が寧ろ專業のやうになつて居るのである。

私の郷里は山に近いから、山の芋は諸所方々で見出される。一體山の芋は、蔓がついて居るうちは大抵の人にその所在は分るが、秋の末から冬にかけて（この時が山の芋の時季なのである。）雑木や笹に纏ひついた蔓が根本の方で折れて落ちてしまふ。殊に雑木山などによつては、私の郷里では、落葉をさらつて地肌を綺麗にするが故に、地中にある山の芋と、木にまとひついた蔓とは中程で断たれてしまふ。さうすると、大抵の人は枯れた蔓を見てこの邊に山の芋があるだらうとは分るが、それが實際どこにあるものかは、つきりしない。然るにこの青年は、落葉をさらつた後で地上に落ちこぼれた山の芋の幾節かの莖をつなぎ合せ、または雑木にまとひついて残つて居る枯蔓から判断して、その山の芋がどの邊の地中にあるか、またはその山の芋はどの位の大きさを推定して掘り當てるさうである。この青年の話によればこゝまで達するには滿二ヶ年修業したさうである。またこの青年は河魚を漁ることも上手であるが、この青年の話を私にくれた人は、この青年が橋の上に立つてじつと水面に見入つて居る姿をよく見かけるさうである。水流の工合や水底にこぼれて居る魚の糞で、この邊にはどれ位の大きさの

魚が潜んで居るか分るのださうである。

職業となれば誰しも賢いには相違ない。この青年の話に今更ら感心するのは、私等の経験いまだ浅い爲めかも知れぬが、普通山の芋掘りなどと笑つてしまふ職業にも、これだけの修業は要るのである。尤もこの話を私にくれた人は、面白半分に多少譏笑を交へた調子で話したやうだったが、さういふ態度で取扱つてしまふのはいけないと思ふ。茲に書きとめて自己反省の料とする所以である。（大正八年五月）

### 心持だけが残る

耶馬溪を流るゝ山國川の沿岸の青村といふところに、普通青の洞門と呼び慣はして居る一つの洞門がある。今は殆ど廢洞になつて居るさうであるが、これが開鑿さるゝに至つた動機に就ては、非常に興味ふかい傳説が残つて居て、あの地方ではかなり有名なものと見え、三年前の中央公論に、田中貢太郎氏が一小話としてこのことを書き、また昨年同誌には、菊池寛氏が「恩讐の彼方へ」と題してかなり長い小説を書いて居る。菊池氏の小説は其當時心理描寫の點から評判に上つたものであるから、それを讀んだ諸君はまだ記憶に新たなことであらう。

私は今茲でそれを紹介しようといふのではない。唯その傳説の梗概を書いてみると、或る武士がふとした動機から女を姦し、人を殺して、自己の罪業のふかさに責められ、佛門に身を投じて禪海と名告り罪業消滅の爲め濟世の大願を起して各地を遍歴し、偶々岩國川のほとりに赴いた時、その川の縁に適當の路なきため、多くの人が往來に悩むことをきいて洞門開鑿を思ひ立ち、前後三十年間、たゞ一人日に夜をついでその事業完成に己が全力を捧げ盡した。然るに先に禪海のために殺された同僚の武士の遺子が、親の讐を探して諸國を經廻つて居るうちに偶々こゝに來合して、禪海を打たうとした。禪海は今生命を惜しむ氣は毛頭ないが、その儘打たれてしまつては折角の事業も途中で挫折せられるのを遺憾に思ひ、自己の心情をうち明けて、事業完成の曉まで命乞をした。これには武士の遺子も非常に感じ入つて、自分もともかくその事業を手傳ひ、漸く三十年にして洞門開鑿の事業を成就したのである。然るにその時には武士の遺子も昔日の怨恨をすっかり忘じ去つて、たゞ禪海の手をとり、只管絶大の法悦に泣いたといふのである。

この傳説のもつて居る内容は實にすばらしい。併し私は今それに思想的解釋を加へようとするのではない。私のこの一文を草した目的は別に他にある。

實は私はこの間、松村君から文藝俱樂部の七月の臨時増刊を借りて來て、伊原青々園氏の『月

の耶馬溪』と題する紀行文を読んで行くうちに、この青の洞門を書いた一節に逢着し、意外にも、次に引用するやうな事實に眼を瞠つたのである。

その洞門は近頃迄交通に利用せられて居たが、新道を開鑿する時、軍隊が騎馬のまゝ通行し得ないといふ理由で破壊されて、今日の新洞門が出來たといふのである。その新洞門の爲めに、舊洞門は却つて邪魔になるので、石を以て埋められた所さへ往々ある。私は之を見て人間のした事業といふものゝ果敢なきを感じずには居られなかつた。禪海が三十年かかつて穿つたといふ青の洞門も何時しか時代の要求に適應しない時が來ると、それが破壊されて更に新しい洞門が穿たれるのである。それと同じく政治でも宗教でも藝術でも、人間の爲した事は、古いものが破壊されて、新しいものが之に代る時が何時か來るにきまつて居る。

かの傳説にも興味があるが、かうした現前の事實にも考へさせられる多くのものが含まれて居る。青々園氏のいふ通り、人間のする事業は洵に果敢ないものであらう。何も古にその例を求めずとも、さういふ事實は我々の眼前に無數にころがつて居るのである。そこに人間がひとしなみに有たねばならぬ悲痛が存して居る。この儼然たる自然の大法則の前にめざめ來る時、恐れ慄かずに居られるものが果して何人あるであらう。實際、人間のした事業の治蹟も、何時

かは亡びる時が来るに相違ない。しかしその事業の治蹟の亡びると同時に、あらゆるものは亡びてしまふであらうか。私はさうは信じない。假令その事業の治蹟は亡びても、若しその事業の背後に人間性に根ざした深い心持がまつて居るならば、その深い心持だけは残る。人間が地上に生存する間はその心持だけは残る。禪海が開鑿した洞門は、今亡びたにしても、禪海の深い心持だけは、我々の心に永久に生きるであらう。我々はこゝに信頼してこの現世に生きて行かなければならない。

我々の作る歌にしても、そこに深い心持を打ち出して来るならば、所謂生活派一派の或る人が主張するやうに、社會的事象がどうあらうと、問題にしないでよ。若し藝術に永遠性と時代性との何れを主として認むるかといへば、私はまじぐらに永遠性を認めるといふ。眞に永遠性にめざめたものならば、時代性はおのづからそのうちに包含せられて来るからである。

(大正八年七月)

## 社會觀斷章四篇

### 笹子隧道の一挿話

甲州の郡内から盆地に出る笹子峠を穿つあの有名な笹子トンネルは、延長にして約一里半位あるとかで、東洋で一番長いトンネルとされて居る。私は學生時代に、甲州の御嶽に行つたとき、一度通つたことがあるが、汽車で恰度十分間もかゝるのであるから、誰しも初めは多少の好奇心を唆られるに相違ない。トンネル内の地層は、時に地質を異にして居ると見え、汽車の立てる地響にもところ／＼で調子が違つて居たことを覚えて居る。

この間、甲州の人が來ての話に、あの峠を歩いて越えるとなると、どうしても三時間はかゝる、乞食でも笹子と初鹿野間だけは汽車に乗るといふ話がある位ださうである。といふのは、向うの里へ行つてから三時間だけお金を貰つて歩けば、その期間の汽車賃六錢だけは優に貰へるからだといふのである。これは乞食までが、近代社會組織の經濟關係に支配される顯著なる一例である。私は非常にそれを興味ふかくきいたので、後日、大正時代の經濟史を編む學者が

あつたならば、これを是非一例として書き加へて貰ひたいと思つて、茲に書きとめておく次第である。(大正八年七月)

### 『労働神聖』説

「労働は神聖なり。」といふ文句は、誰が言ひ出したものか知らぬが、小さい時から聞き慣れて居た。いづれ翻譯か、さなくば日本初期のクリスチャンあたりが作つたものだらうと思ふがまだよく調べて見ない。この場合の『労働』なる語は、この文句が繰返された時代背景を考へてみると、近頃新聞などに見える所謂筋肉労働を指して居たものらしい。農家の長男に生れて幼時から百姓のいそしみを目撃して來た私は、この文句を快くは受け容れなかつた。

しかしその背後に潜んで居る悲壯な心持には、私は高揚的思慕の念から同感することが出來たのは、今でも思ひ返し得られる。同じ労働といつても、工場のそれと百姓のそれと混同して考へることは事物の真相を穿つて居まい。しかし筋肉労働といふことが、現在教師をやつて居る私に、一種の觀念上の重荷となつて居ることだけは事實である。

最近、世界労働會議といふやうな大問題が起つて頻りに労働者の地位が論及せられるにつけ

ても、かの『労働は神聖なり』といふ文句が、絶えて音を潜めてしまつたことを思ひ、これは恐らく資本家若しくは資本家擁護を事とした學者(今は姑く、それが有意識的にてあつたか、無意識的にてあつたかを問はない)が、自己の地位を安全ならしめる爲めに考へた、所謂温情主義から出た言葉でなかつたかと疑つて居る。それは何れにしても、従來はあまり知識といふものが過重視されて、筋肉労働は驚くべき程低く評價されて居た。私は工場労働者に就ては殆ど知識をもつて居ないが、百姓の労働だけは小さい時から目撃もし、また多少経験もあることだから、次のことだけは言ひ切つても差支へないやうな氣がする。即ち、従來の百姓労働は、これを金として見積る時は、その酬えられる程度が極めて乏しかつた、と。尤もこれは各府縣によつて事情を異にするから一概に言ひ得ないことであるが、少なくとも自分の育つて來た周圍に就ては眞實である。工場労働が、その能率増進を期する爲めに、八時間労働制限説の喧ましい現在に於ても、私の國の百姓は十二時間以上の労働はやつて居る。勿論労働の性質にもよらうが、かの一部の有識階級が、現在の百姓の労働は、これをコンデンスすれば三四時間位なものだと事もなげに言つてしまうのは、餘りに百姓を誣ふるものである。彼等は、他人のこととなれば、飽くなき誅求をやつても平氣で居られる徒輩であらう。

話が少し理に陥ちたが、兎に角、人間の生理的力が、その正當な位置に引き戻されて評價せ

られて来たことは、確かに慶ぶべき現象であるに相違ない。日本人は動もすれば、一つの問題を浅く解決してしたり、顔をして居る弊があるから、この問題だけは、徹底的に考へて欲しいものである。總じて生活改革上の問題は、極端と思はれる位に思索を走らせて、初めて意義を生ずるものであるから。(大正八年九月)

### 資本主義的經濟の一惡例

この間、郷里に不幸があつて一寸歸省して来た。田舎は今恰度苗代の盛りで、見事に咲いた紫雲英を田に刈り込んで居る人や、馬で田を働き返して居る人があちこちに見られた。畑の方は麥が穂を孕んでそよ／＼吹く風に心地よく靡いて居る。そして麥畑の中に作つた畝間の空地には、南瓜の苗が既に移植されて居るところもあつた。郷里から戻る際、偶然一緒になつた宇都宮の叔父と、田舎道を歩いて歸ると、叔父は、南瓜の苗と苗との間隔が、昔に比べて餘程狭くなつて居ることを注意してくれた。久しく田舎に遠ざかつて居る私には、それがどういふ訣かよく分らぬので、その理由を訊すと、近頃南瓜がよく熟さぬうちに町へ賣り出すので、以前のやうにその蔓を長く延ばさす必要がなくなつた爲めだとのことであつた。さういへば、私達

が都會に居て食膳にのほす南瓜は、田舎に居た頃、よく食べた紅く粉のふいたものでなく、全く青々したものである。私は叔父の話をきいて、現在やつて居る私等の生活がかうした些細な點に於ても、所謂資本主義的經濟關係に影響せられて居ることを思つて、一寸の間、心を暗くした。南瓜をまだよく熟さないうちに撈ぎ取つて賣ることは、言ふ迄もなく、一部の商人が都會人の新奇を好む弱點に乗じて行ふ資本主義的經濟の商略である。我々は自然性を害ふまでも單に『はつもの』だといふ理由で、よく熟さない青いものを喜んで食べるべき理由が何處にあるであらう。我々の生活は、かうした些細な點でも、資本主義的經濟の惡影響の下に立つて居ることを、よく反省せねばならない。(大正九年六月)

### 新しい村の人達

この間、私の近所に、日向の新しい村に三ヶ月程居たといふIといふ女の人に来て居たので日頃武者小路氏の仕事に多大の興味を感じてゐる私は、その人に来て貰つて、その人が見た新しい村の内情を巨細に話して貰つた。それらを一々こゝに書けば非常に面白いのだが、今はそんな餘裕はない。たゞ是非書きとめておきたいと思ふことを一つ二つ。



新しい村は今のところ経済的には殆ど獨立して居ない。目下は（といつても、それはその人が居た去年のことだが）主として開墾事業に従事して居るさうだが、皆苦勞してゐるさうである。こゝに集つて來る人達は、殆ど肉體的勞働には經驗をもつてゐないものが多く、勞働を非常に楽しく出来るものゝやうに考へて來るため、存外骨が折れるのに失望（？）してしまふ。それ故、雨が降つて仕事が休めさうになると、皆の顔が一樣に喜びで輝いて來るが、一旦曇つた空が晴れさうになると、今度はその反對に悄氣方しよひかたは一通りでない。何時かも自分の好きな仕事をしていゝといふ内規にしたところ、誰も草撈りをするものがなく、畑に一面に草が生えてしまつたので、これはいかぬと氣がついて、日程を作つて、皆が一緒に同じ仕事をすることに改めたといふことである。肉體的勞働に經驗のない人達が、勞働快樂説を抱き勝ちなのも無理がないと思つて、私は微笑みながらその話をきいた。

次にこゝに集つて來る人達は、武者小路氏の人格を敬慕し、その主張に共鳴するものであるから、武者小路氏對彼等の間は至極圓滿に行つてゐるが、彼等同志の間には、かなりのひがみも反感も出るさうである。それにその人達の多くは、順境に育つて來たといふよりも、世間的に唐遇されて來たものが多いので、特にさういふ缺陷が著しいといふことである。尤もさういふ性情の人達であればこそ、現在の社會制度の缺陷を痛切に意識して、人類愛に對する熱情が

*dreamer*

燃え上るのであらう。私は、この話をかなりの戰慄なしには聽くことが出来なかつた。さういふ點で、その人達が苦しみぬくといふことは、必ずしも悪いことでない。その人達の上に祝福あれ。（斷つておくが、この話をしてくれたI氏は、生れながらの純情をよく育てて來た理想家である。夢想者フイムといつては失禮に當るだらうが）

要するに、新しい村に集つて來た人達は、例へば、圓い形をした人類愛といふ理想を抱いて來た。さて新しい村に落ち會つて、各自おのづかにその圓い形を重ね合せてみると、それが皆、何處かでイビツになつて居て、蝕ひ違つて居るのである。そこに彼等は驚きもし、また苦しきもするのである。と、かう私は解してゐるが、果してどんなものか。圓い形を胸に描いてゐるぬのも不幸だが、それは概念的であつてはいけない。矢張り苦しい體験で充實して行かねば、やかては風船玉の如くつぼんでしまふものである。これは何も新しい村の人達ばかりの問題でなくて、私自身の問題である。I氏の話はかういふことを私に教へてくれた。（大正九年九月）

## 藝術觀斷章十篇

## 一 莖の草

この話は何の本に出て居るのか、私は知らない。話の大體の筋はかうである。——或る禪僧が道を歩いて居りながら、路傍の一莖の草を折つて、地上に挿した。そして俺は伽藍を建てたと呟いた、といふのである。後々先もないやうな極面白くもない話である。禪宗ではこれをどう解釋して居るのか、私はまだつい聞いてみる暇もないが、これを私の藝術觀に引きつけて考へてみる時に、そこに無量の滋味が溢れ出づるのを禁じ得ない。

この禪僧が折り取つた路傍の一莖の草は、我等が足を一步戶外に踏み出せば、到る處で眼に見ることの出来る洵につまらない一莖の草である。しかもその一莖の草が、禪僧の手で折り取られて地上に挿された刹那に、その一莖の草は、單なる一莖の草でなくなつた。それは既に堂々たる立派な伽藍と化し去つたのである。この心理が私には非常に面白く思はれる。

禪僧は一莖の草を地上に挿すことによつて、伽藍を建てたといふ心持を成就した。その時、

一莖の草は、單に一莖の草であるといふ外に、禪僧の心持を生かし切つたのである。恐らく禪僧はその刹那、路上に佇立して、胸に絶大なる歡喜を味はつたに相違あるまい。そして眼前の堂々たる伽藍に讚嘆して見入つたに相違あるまい。

固より一莖の草に何處にでもある。しかしその禪僧をして、一基の伽藍を建てたと言はしめたものは、その場合の一莖の草でなければならなかつた。それによらねば、禪僧は伽藍を建てたといふ氣持を生かし切れなかつたのであらう。

私はこの一莖の草が即ち藝術だとおもふ。藝術は抽象的のものでない、飽く迄具象的のものでなければならぬといふことを、この話は語つて居る。かの禪僧が伽藍を建てたといふ氣持そのものは、抽象的のものである。しかも一莖の草を地上に挿して伽藍を建てたといつた時に、その氣持は生きて來た、そして具象的のものとなつた。また一莖の草を借りねば、その氣持は生かされなかつたともいへる。禪僧の氣持は因である。一莖の草は機である。因は機によつて生かされたのである。

歌でもさうだと私は思ふ。自分の心持をいかに刻明に説明し叙述しようとしたにしても、その心持が或る形象に觸發して生きて來ねば、眞の藝術とはならない。一莖の草に禪僧の心持が通つて生きて來たと同じやうに、その形象に作者の心持が流れて生命をもつて來たときに、初

めてその形象は生きて来るのである。心持に甘へる歌が感傷歌に陥り、形象に執する歌か悪寫生の歌と墮する所以も、かう見る時にはつきりして来る。

我等は常に一莖の草を心にもつて居らねばならぬ。(大正六年十一月)

### 一本の線

大雅や蕪村の畫を見ると、そこに用ゐられた線が實によく畫家の心持を生かして居るのに敬服する。ジツと見つめて居ると、その線によつて描かれた岩石なり樹木なりは、視界から消え去つて、線だけが動いて、言葉を出して居るやうな氣がする。あゝいふ線を描いた大雅や蕪村はどういふ人だつたかと思つて、初めは羨望の情に堪えぬが、はては面憎くなつて来る。

たかが一本の線だ。誰にだつて引けさうに思ふが、それがどうにもかうにもならない。大雅や蕪村はその線を生かし、その線によつて、また大雅や蕪村は生きて来るのである。單なる一本の線のやうに見えて、實はさうでない。大雅や蕪村の天才と其他の凡庸畫家との岐れ目がこゝにあるかと思ふと、我等はその一本の線でも見通し難い。

私等の作る歌が、その歌をなして居る言葉が、彼等の用ゐた線の如く、自由に暢達に心持を

表はして居たならば、と思ふ。その際は恐らく言葉の擔つて居る内容は消えて来るに違ひない。そして言葉だけが、言葉のリズムだけがあとに残つて、この心持を語つてくれるであらう。しかしそんな日の来るのは何時だらうか。或は一生來ないかも知れぬ。さう思ふと私は寂しい。

(大正六年十一月)

### 繪畫に對する一謬想

繪畫で或る想念(假りに思想といつても概念といつてもよい)を現はさうとする畫家がある。繪畫に想念を求めようとする鑑賞家がある。何れの態度も根本的に謬りである。さういふ態度をとるところから、繪畫に對する淺薄な功利的見方が生じてくるのである。繪畫の本領は一見深刻さうに見えて、而も實際には表面的な、想念といふやうなものを現はすところにはないのである。

この點に於て、多くの日本畫家はまだ眞に覺醒して居ない。今手近な例を取つて見れば、本年の文展に出た鑄木清方氏の『ためさるゝ日』である。あれは耶穌教を信する遊女が踏繪をせんとする一瞬間前の心中の恐怖、幽悶、逡巡などの情を現はさうとしたものださうであるが、

私は既にさういふ一種の想念を繪畫に現はさうとする態度がいけないといふのである。人によつては、あの繪から深刻な冥想に誘はれたものもあらうが、私などは、たゞ清方氏の、遊女を描いて下品に墮せざる官感的表現のすばらしさに讚嘆の眼を向けた迄である。そしてそれだけで十分なのである。

何となれば繪畫といふものは、作品に即していへば、形態と色彩との綜合美（手綺麗といふやうな感傷的美を指すのではない）の表現である。作家に即していへば、さういふ美の世界を通じての自己の全人格の放射である。さういふ美の世界には、説明といふやうな手温い手段はない。想念といふやうな甘いものは當然拒否されねばならぬ。作者の全人格が、想念を借りず説明を俟たずして、美の世界に顯現されねば、その作るところの繪畫は眞の藝術品として許されぬのである。

短歌でもさうである。こゝでは美に代ふるに感動といふ言葉を以てしよう。短歌は感動を通じての作者の全人格的表現でなければならぬ。短歌に想念を模索せんとする人は災なるかな。遂に短歌をして一種の道歌に墮せしめずんば幸である。（大正七年十月）

### 外に求むるもの

私が或る雑誌で、某口語歌論名の所論の淺薄さ加減を嘆ひ、併せてその作るところの口語歌なるものが、私等の考へて居る歌の本質と著しく隔絶した内容をもつて居ることを指摘したところ、彼はその主宰する雑誌で、カムシヤー教授(?)とかいふ西洋の評論家の詩學史的評論を譯載し、バイロンもコルリツヂもテニスンも何れも詩の内容とするところに就ては違つた見解をもつて居た位だから、詩歌の本質などは分るものぢやないといふやうな意味のことを云つて居た。私も大學では、故ローレンス博士から英詩學は多少教はつた覚えもあるが、一體何とか教授とかいふ面々の説く評論には、詩の外殼（形式と逸言へない）を模索して己が意を得たりと做すものが、十中八九を占めて居るので、バイロンの詩論でも、コルリツヂの詩論でも、その時代の背景を考へないで、單に字面だけに拘はつて解釋して居た日には、何年経つても詩歌の本質などは分りやうがないのである。然るに嘆ふべきかな、彼口語歌論者は、さういふ手合の評論を唯一の楯として、歌の本質が分らぬと、白晝平氣で言つて居るのである。苟も一隻眼を具へて歌作に従ふものが、歌の本質が何處にあるやも自覺しないのは、何に原由して居るか、こ

れらは何れも自己衷心の聲に耳を傾けないで、常に信念の基礎を外部に求めようとするからである。外に求むることの災なることは、これでも知れる。(大正八年九月)

### 主義の人生化

『人生の爲めの藝術』乃至『生活の他に藝術なし』といふ主義に對しては、誰も反對するものありとは思へない。それは餘りに分り切つた眞理だからである。しかしこの分り切つた眞理も、或る時代には氣づかなかつたのである。それ故、その當時の人々に比ぶれば、沒批判的にこの主張を承認し得る現代に生れ合せた我々は、甚だ多幸といはねばならぬ。

この主義は功利的に見れば、藝術をその貴族的取扱ひから奪ひ返す上に最も役立つたのである。少しく誇張していへば、藝術を天國から地上に引き卸す爲の大きな働きをしたのである。然るにこの主義が分り切つた眞理とされて居る現代に於ては、更に之を逆用して、藝術の本質迄も蹂躪させる援軍に引き入れようとする者があるから驚くのである。

私は、何も茲で藝術論をしようといふのではない。たゞ從來我が國の文學美術で尙ばれて來た『藝』といふ心持を、一ぱし人間的要素を排斥したものゝやうに思ひ做して、その奥に潜む

精神的鍛鍊に考へ及ばざるものが、この主張を遮二無二ふり翳して來ることを甚たいぶかしく思ふのである。『藝』が所謂趣味と同義語であり、或は人間的要素から遊離した氣分に溺るゝ意味ならば即ち止む。若しそこに私の竊かに考へてゐるやうな苦行の道を豫想するならば、『藝』を拒絶する人のあまりに樂天的なることを憐まざるを得ぬのである。

凡そ一つの主張は、これを單に抽象的に考へてはいけない。さういふ考へ方は啓蒙運動乃至革新運動としては確に有効である。しかしそれ以上は、もつと具象的に、換言すれば複雑微妙なるこの人生に適應するやうに同化して來ねば嘘である。(大正九年一月)

### カメラと眼

私はこの間、中學の五年にリーダーを教へて居ながら、『カメラ』(暗箱)といふ章の中で、次のやうな文句に出逢つて非常に面白く感じた。

カメラが天體を見るのは、我々の眼のやうに、一時に一つの星のみに向けられるのではない。その視界に這入つて來るすべての星は、地圖に於けるが如く、夫々の精確な位置で現はれるのである。

これを碎いていへば、我々の眼が星を見る時は、中の一つの星が焦点となつて、その他の星は焦点を遠ざかるに従ひ、だんくほんやりと映つて来るに過ぎない。然るにカメラでは、その視界に這入つて来る程の星は、皆夫々その光度に應じて現はれる、といふのである。これがカメラが自然科学の研究に非常に貢献した理由で、やがて我々の眼とその作用を異にする所以でもある。

この眼の作用——これが藝術に於ては重んぜられねばならぬ。といふのは、自然そのものに就ていへばたゞ無限に擴がつて居るのみで、何處にも焦点といふものはない。然るにそこに焦点を附するのは、我々の眼の作用によるのであつて、更に遡つて考へれば、我々の主観がそれに働きかけるのである。自然そのものと、自然を再現した藝術——假令それがいかに拙くとも——との間には、少くともかゝる根本的差異あることは、之を認めぬ訣にゆかぬ。我々が繪畫を評する際に、中心が散漫である、乃至、統一に缺けて居る、などいふのも、畢竟は焦点が定つて居らぬことを指すのである。

今頃になつて、自然を寫生した歌では作者の主観が出ない、などといふ愚昧者はあるまいと思ふが、兎もすればこの間の關係が忘れ勝ちになつたのは遺憾である。固より主観に濃淡の差はあれ、藝術となるからには、既にカメラの作用と眼の作用との相違はそこに當然現はれて

來るのである。

我々はカメラが自然研究に有用なことはこれを知る。しかし藝術に於ては、この天資の肉眼は、一層重んぜられねばならぬのである。(大正九年十一月)

### 俳句の感味

最も強く吾人の中心生命に觸れたものを端的に表現するといふ意味で、俳句は人間のイメージネーションに訴へる藝術だと思ひます。畫でいつてみれば、エチュードのやうなものでせうか。従つて、それから享ける感味も、印象的、示唆的の味ひです。これが、俳句が一步墮落すれば一方に、獨斷的概念的のものとなり、他方に、表面感覺以上に出でない視覺的のものとなる原因だと思つて居ます。(大正九年十二月 石楠)

### マルセル・サンバの評語

この間、現代の佛蘭西畫壇の巨匠なるアンリ、マチスの評傳を書く爲め、マルセル、サンバ

といふ人の『アンリ、マチスと其制作』といふ評論（新城和一氏譯、中央美術大正九年七月號所載）を読んだところ、非常に興味ある一節に逢着したので、少し長いが左に抜萃してみる。

此藝術家（マチスのこと）が自己を求めた時、餘りに其努力を愛しすぎた時代があつた。（中略）かゝる見地に立つて、我々は此畫家の描く繪の中に種々雑多の斷片の力強い大膽さを味ふのである。そして目的を超越したかゝる恐ろしい努力が、その非常に力強い勇氣を以て、我々を向上させてくれるのである。それから藝術家の野心は増大して來た。彼はその作物をば支配する。そしてそれから、目的がその道程よりも、腰骨の力よりも以上に彼を捉へる。彼は實現される効果以上に努力を現はすことを拒む。その時、彼の友はかう言ふであらう。彼が今迄其努力の働きを現はさうと努めて居たと同様に、今はそれを隠すことに一生懸命になつて居る。と、

この評語がマチスの藝術に當つて居るか否かは私の問ふ所でない。たゞ嘗ては努力を愛したものが、今はそれが畫的效果以上に畫面に現はれるのを隠さうと努めてゐるといふ、そのメンタル、プロセスは注意する價值がある。勝れた藝術は努力が潜在力とならなくては出來ぬものだが、併しその努力が表面に露呈しては、勝れた藝術と稱することが出來ない。努力は飽く迄も衷に沈潜して居なくてはならぬ。その人の藝術を進展させた力が、今は却つて累ひとなるの

は、その人の藝術がまだほんものになり切つて居ない證左である。かうはいふものゝ、さういふ勝れた藝術は、ザラに路傍に轉がつて居る訣ではない。我々凡人にとつては、努力を愛することを決して苦に病む必要はなからう。況してさういふ努力によつて生れた藝術が、努力を回避した凡人の藝術に立ち優ること萬々なるは、言はずして明かである。自らの爲めにこの箴を作る。（大正十年四月）

### 作家としての覺悟

私は平生、作家といふものは、藝術上の問題は實際の作品を提示することによつてのみ解決して行くべきものだといふ信念をもつて居る。その他のことは一切セカンダリの問題である。議論は、啓蒙的の意味でか、若しくは自己の信念を確立する上では必要のものであるが、本來の理想をいへば、作家は黙つて制作してゐればよいのである。セザンヌに畫論はあまりないと言はれるのは、尤ものやうな氣がする。それと反對に、未來派立體派に理論の多いのは、まこととは頼もしくないのである。

これとは稍々意味を異にするが、荻原井泉水氏がこの間芭蕉の俳句に共鳴を見出す人は、俳

句の制作に従ふべきが當然である、といふやうな意味のことを言はれたのは、私にも背ける氣持がする。そこ迄行かねば本當は嘘でないかとも考へられるが、西行に愛著を感じた芭蕉が俳句で始終したと同じく、芭蕉に共鳴を見出す我々が、和歌で始終したとても差支へないのである。(大正十年五月)

### 謬つた藝術の見方

この間、伊藤證信氏が主宰する所の『無我愛』といふ雑誌を読んだところ、その中に採録されてあつた一誌友の書簡の末に、芭蕉の作として『此道を人も通らぬ秋の暮』といふ句の擧げてあるのが眼についた。筆者のつもりでは、その書簡の中で論じて居る寂寥とか孤獨とかいふことに關聯させて、偶々記憶にあるところのこの句を擧げたのであらうが、これが芭蕉晩年の作なる『此道や行く人なしに秋の暮』といふ句の思ひ謬りなることは、一讀直ちに明かである。かういふ思ひ謬りは誰しもよくやることで、別に珍らしいことではないのだが、それが所謂宗教的情緒に豊からしい人の思ひ謬りであるだけに、私には、わけても氣になるのである。といふのは、その人にとつては、この種の思ひ謬りは殆ど問題にならぬだらうと思はれるからであ

る。一體この句は、何れかといへば觀念的臭味の顯著な方ではあるが、しかし『此道を人も通らぬ』であつては、洵に困るのである。芭蕉は、既に初五で『此道や』と強く言ひ起して、そこに多少の感をもたせて居る。それから中七の『行く人なしに』は、遠く眺め渡した心持を示唆したもので、『人も通らぬ』といふやうな概念とは、その本質を異にするものである。若しこの兩者を容易に混同していふものならば、芭蕉は恐らく苦心して句作などはしなかつたことであらう。觀念的表現は萬人に分りがいふ、(殊に思想を喜ぶ人にとつては)。しかし藝術の根本要素なる具象的表現に至つては、眞にこれを味ふもの甚だ少ないといふ事實を、私はこの場合つくづく感じた次第である。(大正十二年十一月)



芭蕉篇

### 芭蕉の生活態度に就て

彼が直接生産に與らなかつたといふ意味では、芭蕉は確かに隠遁者といふ名を受くるに値するであらう。しかし隠遁者といふ語を、實生活を回避した人、即ち『一世捨人』と同義に解して來る時には、彼は少なくとも隠遁者でなかつたことだけは、斷言しても差支へあるまい。私は今この一文を、彼の生活態度を闡明する目的の下に草しようとするものである。

私は先づ、芭蕉が俳諧生活にはひつて行つた動機を訊ねて見る必要がある。彼は格式こそ低かつたであらうが、兎に角士分の家に生れて人となつたものである。そして九歳の時から、伊賀上野の城代藤堂良精の臣となり、その子の良忠に仕へて、小扨従の役を勤めて居たのである。彼が寛文六年、二十三歳の折、所謂遁世を企てた原因に就ては、種々の説を立てるものがあるが、現今では、主君良忠(俳號蟬吟)の天死によるといふ解釋が、どうも眞に近いやうである。さてこの場合、彼の執るべき道としては、少くなくとも四通りは考にのほせることが出來よう。時代は、徳川幕府の基礎が確立して、家康が經世策として残して行つた封建制度が、大

盤石の上に据えられた頃である。それ故、依然父祖の業を襲いで、藤堂家の臣として立身出世を計ることが、その第一の道である。この道は、マルクスに従へば、所謂生産掠奪者の地位に立つことで、その當時にあつては、最も高い生活と見做されて居たものである。芭蕉にしては恐らく最も賢明にして安固な道であつたに相違ない。しかし自分が幼少の頃から仕へて居た主君が夭折したことであり、且つ殉死をも仕兼ねまじきほどに無常觀に責められて居た芭蕉としては、この道によつて立身出世を計ることは、恐らく潔よしとなかつたところであらう。

第二の道は、飽くまでその無常觀を固執して現世との羈絆を絶ち、佛門に歸依することである。この道は、第一の道とおなじく、時には、それ以上に、尊むべき生活と思はれて居たものであつて、いはゞ隱遁者の生活である。主君の夭死に會つた芭蕉には、かなり自然な道であつたやうに思はれるが、しかし多情多感の彼に、果してそれが堪へ得られたかどうかは、大に疑問とするところである。芭蕉が進んでこの道を執らなかつたことは、後から考へてみて、彼を幸にしたのではないかとさへ考へられる節がある。

第三の道は、學問によつて身を立てる生活であつて、この生活も、前者と同じく、その當時に於ては、世人から、かなり尊敬の眼を以て見られたものである。芭蕉が結局この道を選んだことは、主君の良忠公蟬吟が、國學者北村季吟を師として俳諧の道を學んで居た因縁も大に手

傳つて居るので、この場合の芭蕉としては、一番當を得た行き方であつたらうと思はれる。たゞ後年、彼が俳諧で名を成した一事から推して、その所謂遁世當時から、既に俳諧を以て身を立てようと決心したかの如く思ふのは、甚だしい謬見である。

最後に、彼に残されたる第四の道としては、其の當時の用語例に従へば、一段と身を貶して農工商いづれかにたづさはる生活であつた。これこそ眞に直接生産に入り込む道ではあるが、その當時の時代意識から見ると、芭蕉がそこ迄思ひ及んだかどうかは大に疑問である。殊に芭蕉は生來虚弱の身であつたらしく思はれるところから考へて、この道を執らなかつたといふことは、彼としても極めて自然であつたやうに思はれる。

かう考へて來ると、芭蕉が學問によつて身を立て、結局俳諧生活にはひつて行つたことは、その動機に幾分隱遁的の心持を交へて居たにせよ、彼自身は決して實生活を回避するといふやうな考でなかつたやうである。彼が晩年近江石山の奥の國分山に幻住庵を結んだ時、彼は『幻住庵記』を書いて、その結末に次のやうな告白をして居る。

かくいへばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡をかくさむとはあらず。やゝ病身人に倦みて世をいとひし人に似たり。情ら年月のうつりこし、拙き身の科をおもふに、ある時は仕官懸命の地を羨み、一たびは佛籬祖室の扉に入らんとせしも、たよりなき風雲に身

をせめ、花鳥に情を勞して、暫く生涯のはかり事とさへなれば、終に無能無才にして此の一筋につながる。

この文章中の『ある時は仕官懸命の地を羨み、一たびは佛籬祖室の扉に入らんとせしも』とあるは、芭蕉三十三歳當時の、所謂遁世前のことを指したものが、乃至それ以後のことを指したものが明かでないが、兎に角、彼が寒巖枯木流の隱遁者を以て自ら任じて居なかつたことだけは、確かである。さういへば『やゝ病身人に倦みて世をいとひし人に似たり』といふ語句も世人から隱遁を以て目せられたことを自らくすぐつたく感じて、密かに辯疏したものだとも解せられるのである。芭蕉はまた、『芳野紀行』の冒頭に於て、次のやうに述懐して居る。

百骸九竅の中に物あり。かりに名づけて風羅坊といふ。誠にうすものゝ風に破れ易からん事をいふにやあらむ。彼れ狂句を好むこと久し。終に生涯のはかりごとゝなす。或時は倦んで放擲せん事を思ひ、ある時は進んで人にかたん事をほこり、是非胸中にたゝかふて是が爲めに身安からず。しばらく身を立てんことを願へども、是が爲めにさえられ、暫く學んで愚をさとらんことを思へども、是が爲めに破られ、終に無能無藝にして只此一筋に繋る。

芭蕉は、俳諧を以て、自分が『生涯のはかりごと』と決めてからさへも、果してこの道が、

自分に恰當したものかどうかを疑つたこと、一再ではなかつたらしい。私は、彼に熾烈なる權勢慾があつたとも認めず、また、名利の念が人一倍に強かつたとも信ぜぬものであるが、さらばといつて、世間の一般人が考へて居るやうに、世俗に超越して、高く清く行ひ濟ました隱遁者であつたとは思はぬのである。尤も彼の生活は、一見人間社會を後にして、ひたすら自然の閑寂をのみ欣求して居たやうに見えるけれども、芭蕉としては、さうすることが自己の生存の意義を一層確實に把握する道程だつたのである。従つて、彼が俳諧道の理想境として居た『寂び』といふのも、畢竟は、現實生活に徹したところから自然と滲み出して來る味ひのことであつて、人間社會を遊離してさういふものが大氣中に存在して居るとは考へて居なかつたやうである。

芭蕉が現實生活に注いだ愛情の眼の、いかにみづ／＼しいものであつたかは、その句なり文章なりがよく證して居るところであるから、私はそれらを一々引用しようとは思はない。たゞこゝに忘れてならぬことは、彼が一般人以上に、世俗の義理人情によく通じて居たことである。この點に於て、彼は寧ろ現實肯定論者であつともいへばいへるであらう。彼が、『朝顔に我は飯食ふ男かな』の句を作つて、弟子の其角の大酒を戒め、また『白露の寂しき味を忘るゝな』の句を贈つて、弟子の饗宴の奢侈を諷し、或は、弟子が芭蕉に絹物の衣服を贈つたのに對

して、これは自分の分に過ぎるものだといつて斷つたことなどは、さながら道學者流の態度であつたとも見らるゝのである。私が何故、特にこのことを言ふかといふに、俳諧道を奉ずる信念にかけては決して人後に落つると考へなかつた芭蕉も、この道が直接利用厚生に資するものだとは、恐らく思つて居なかつたであらう。即ち現代の言葉でいへば、その俳諧道が直接生産に與るものだと信じて居なかつたであらう。さう考へて居る芭蕉が、自己の物質生活に對して、最少限度の衣食に甘んじ、また俳諧生活に遊ぶものに對しても、出来るだけその方針を執らせようとしたことは、當然さうなければならぬところである。芭蕉の生活態度を目して、直接生産に與からなかつたことを批議する人は、その半面に、芭蕉が自己の分を守ることをよく知つて居た此種の心遣ひを看過してはならぬのである。

有島武郎氏は、嘗て、『一つの宣言』を草して、ブルジョア階級に生れた自分が、現代に對してなし得るたゞ一の務めは、プロレタリア階級の中に立ち交つて所謂階級戦に従事することではなくて、今迄現代の社會組織を利用して横暴を逞しうして來たブルジョア階級の人々に、もういゝ加減に觀念の眼をつむつてはどうかと諦念させることである、といふやうな意味のことを言はれたと記憶する。この『一つの宣言』はその當時兎角の非難はあつたものゝ、私は竊かに有島氏が自己の分をよく知つて居ることに、いたく推服したものである。これと芭蕉のそれ

とは、稍や意味は違ふであらうが、しかし芭蕉が、その生活態度の上で、自らその分をよく守つたことは、洵に欣すべき極みである。

私は世人が芭蕉を隱遁者と見ることに對して特に抗議を提出しようとは思はない。しかし、さういふ非難を芭蕉に浴びせかける人は、その前に彼の這般の生活態度をよく心に銘しておくべきことを慫慂したのである。(大正十二年三月)

## 芭蕉の對句作者態度に就て

芭蕉が句作に對してどういふ態度を執つたかは非常に興味ある問題であるか、私はまだよくは調べては居ない。併し晩年の芭蕉が自分の作に對して容易に許さなかつたことだけは、芭蕉の臨終を記したといふ『花屋日記』によるも明かである。

それはそれにして、芭蕉は己れと道（俳諧道）を同じうする人々に對しては常に限りなき愛憐の情を注いでゐた。『芳野紀行』（貞享五年、四十五歳の折の作）には、旅の感想を述べた後で、次の如く記して居る。

泊るべき道に限りなく、立つべき朝に時なし。只一日の願ひ二つのみ。今宵能き宿借らん  
草鞋の我が足に宜しきを求めんとばかりは聊かの思ひなり。

時々氣を轉じ、日々に情をあらたむ、若し僅かに風雅ある人に出會ひたる悦び限りなし  
日比は古めかしく頑なりと惡み捨てたる程の人も邊上の道づれに語り合ひ、埴生蓑のうちに  
見出したるなど、瓦石のうちに玉を拾ひ、泥中に金を得たる心地して、物にも書付け、

人にも語らんと思ふぞ、又是旅のひとつなりかし。

一體旅に出ると、どんな人でも多少は感傷的氣分になるものである。これは日頃自分と交渉の密接なる周圍から離れて、知らぬ自然と山河の間に自己を見出した孤獨に伴つて起つて來るものであらう。殆どその半生を『旅をすみか』として送つた芭蕉にも、全然それがなかつたとはいへぬ。しかし、富士川のほとりで捨子を見て、『汝父に憎まれたるか、母にうとまれたるか。父は汝を憎むにあらじ、母は汝をうとむにあらじ。只是天にして、汝が性の拙きを泣け』と言ひ得た程に心の鍛へられて居る芭蕉が、一方で『若し僅かに風雅ある人に出會ひたる悦び限りなし』と感想を洩して居るのは、芭蕉が如何に風雅の道に愛着をもつて居たかを察せられる。彼は『日頃古めかしく頑なりと惡み捨てたる程の人も』斥ける心はもたなかつた。彼は、風雅の道に志すといふことが既に尊い機縁だとして居たやうである。その際には、古い新しいは問題ではなかつた。古くともいふ、既にその道に目ざめたことで、自分に縁が繋がれたものと思つて居たのである。

さらば、芭蕉はその境に安住してそれ以上を人に求めなかつたかといふに、さうではない。

『奥の細道』（元禄二年、芭蕉四十六歳の折）には、芭蕉のもつと濕つた心が實に遺憾なく披瀝されて居る一節がある。この一節は幾度讀み返しても飽くことなく、また讀む度毎に眼の濕

ふを覺える程、芭蕉の眞骨頭に觸るゝ感がある

最上川をのらんと、大石田と云ふ所に日和を待つ。爰に古き俳諧の種こぼれて、忘れぬ花の昔を慕ひ、蘆角一聲を和らけ、此道にさぐり足して新古二た道に踏み迷ふと雖も、道しるべする人しなればと、わりなき一卷殘しぬ。このたびの風流爰に至れり。

芭蕉が滞在したのは、大石田の一榮、通稱高野平左衛門といふ人の宅であつた。「蘆角一聲」とは胡茄聲などと同じく、旅中の哀愁をいふのである。「新古ふた道」には、むつかしい故事があるさうであるが、私は俳諧の新舊兩派と解してよさうに思ふ。「わりなき一卷」とは、「夢太拾遺」に、山形町として、

五月雨を集めて涼し最上川

芭蕉

螢をつなぐ岸の船杭

一榮

爪畑いざよふ空に影まちて

曾良

里を向うに桑の細道

川水

に始まる一聯が載つて居るが、これを指すのである。最後の「此度の風流爰に至れり」に至つては、芭蕉の面目躍如として見るがやうである。

これでも分る通り、芭蕉は、多少でも深く俳諧の道に入つた人に對しては、只管正風に着か

んことを慙憊した。そして「新古二道に踏み」迷ふ者を愛憐の眼を以て見た。これによつても如何に芭蕉が人間をよく理解した藝術家であつたかを、察せられるのである。「奥の細道」はこの種の交友關係を中心として見て行つたわけでも、芭蕉の人格を反映した敬慕すべき記述に富んでゐるが、其等は何時か機を見て書くことにしよう。

かくの如く、初歩の句作者に對して極めて寛量であつた芭蕉も（弟子に對する態度がどうであつたかは、私は多く知らない。）己れを持することは極めて嚴肅であつた。彼は元祿七年九月（五十一歳）大阪の門人之道の宅に逗留してゐる間に、偶々腹痛に悩み、下痢を起したので、十月三日に花屋仁左衛門の裏座敷に移つて、同月十二日遂に病歿したのであるが、今「花屋日記」によると、六日の條に去來の筆として、次の如く記されてゐる。

六日。天氣陰晴極まらず。朝の食入麴三箸、前夜終宵寢入の給はず。暫く睡眠し給ふ御目さめより、去來を近く召して、先の頃、野明が方に殘し置き侍りし大井川に吟行せし句

大堰川波に塵なし夏の月

翁

此句あまり景色過ぎたれど、大井川の夏氣色言ひかなへたりと思ひ居たりしが、清瀧にて

清瀧や波に散りこむ青松葉

翁

と作りて、事がらは變りたれど、同巢（註。同構の意）なりと人の言はんも如何なれば、

大井川の句捨侍らんと汝に申したり。然るに頃日、園女に招かれて

白菊の目に立てゝ見る塵もなし

翁

と吟じたり。是又同案に似て句の道筋同じ。それ故前の二句を一向に捨侍りて白菊の句を残し侍らんと思ふなり。汝が意如何。去來涙を浮べ、名匠の斯く名を惜しみ道を重んじ給ふ有難さよ。纒句一章にさまで千辛萬苦し給ふ御病惱の中の御骨折風雅の深情こそ尊けれ。眼あるもの何者か此句を同案同巢と見るべき、云々。

かういつて去來は漢詩の例などを引いて、三句共景情句意各々別種の趣をもつて居るから残しておいた方がいと述べたので、芭蕉も非常に満足したと書いて居る。芭蕉が臨終の床に臥して、猶ほ『名を惜しみ、道を重んじ』たことは、この間の消息がよくそれを語つて居る。現今では、『風雅』『風流』といふ言葉は、直ちに耽美的の意に解されてゐるが、しかし芭蕉に於ては、それが宗教といつてもいゝ境まで蝕ひ入つて居たことも、これで分るのである。芭蕉は佛者が一方に於て小乗を説き、他方に於て大乘を説いたと同じ心を以て、俳諧道に對して居たのではなからうか。若し私の以上の觀察にして謬りなしとすれば、後世に於て風雅風流の道が墮落して來た徑路もはつきり背づけるやうな氣がする。單にこの一點に執して風雅風流の道を責むることは、甚だしう的外れた見方だと言はねばならぬ。(大正十年五月 短歌雜誌)

### 芭蕉晩年の句に見ゆる二傾向

最初の豫定では、芭蕉晩期の作風と云つたやうな主題で書くつもりで居たが、それには、先づ、初期中期の作風を一貫り明かにする必要があるので、現在の私には、荷が少し勝ちすぎるところから、茲には、芭蕉晩年の作を通じて窺はれる二つの重要な傾向に就て、極めて簡単な考察を施してみようと思ふ。

その前に芭蕉終焉の年の事蹟を略述しておく必要がある。

芭蕉は、元祿七年の正月を深川の芭蕉庵で迎へた。その時、彼は五十一歳になつて居た。櫻時には、上野で花見を催したことなどもあつたが、豫々西國漫遊を志して居た彼は、遂に五月八日、江戸を立つて道を東海道に取り、島田、名古屋、美濃方面に於ける弟子達の間を経歩き再び名古屋に戻つて、それから故郷の伊賀に入つた。伊賀に駐ること暫時にして、彼は京に上り、轉じて近江に行き、粟津の舊草廬なる無名庵にはひつたが、偶々郷里に居る家兄の招ぎに會つて、再び伊賀の上野に歸り、そこで七月の盂蘭盆會を營んだ。その時には、郷里に一箇月



半以上も滞在して、恐らく今迄経験しなかつたであらうと思はれる極めて暢々した生活を送つたが、恰もその頃、大阪の連衆が、切に彼の來阪を懲懲して居たので、九月八日再び伊賀を立ち、途中奈良で重陽の節句を迎へ、十日大阪の之道亭に着いた。大阪へ行つてからは、彼は隨所で催された句會に臨み、寧日もない有様であつたが、偶々九月二十九日、園女亭に於ける句會の饗應から胃腸を害して、再び起つことが出來ず、遂に十月十二日の夕刻、花屋仁左衛門の裏座敷で病歿したのである。

芭蕉のこの年に於ける作句數は、沼波瓊音氏編の『芭蕉全集』によると、八十三句の多きに上つて居て、芭蕉としては多作の部に屬する。今、それらを一々讀んでみると、かなり複雑した色彩をもつて居るが、私は今、最初にも述べた通り、その中から二つの著しい傾向を抽出して見ようと思ふのである。

第一の傾向は、作者が平明な心を持って自然現象に對つて行くといふ態度から生れて來たところの、極めて淡々たる味ひをもつた句に見られるものである。それらは、自然現象を詠んで居ながら、毫も對象の興味に囚はれず、またそれを表現するに、敢て彫琢を施さうといふ成心の痕が見えない。それ故、讀む人によつては、あまりにその味ひの淡すぎるのに不満を抱くものもあるだらうが、しかし讀むこと再び三たびするに及んで、そこから何ともいへぬ滋味の滲

み出て來るのを感じるであらう。さらば、さういふ句は、どんな心境から生れて來るかといふに、私の察するところでは、自然のこゝろに冥合するといつたやうな自我没入の心境を所縁として生まるゝものだと思ふ。そしてこの心境は、生れながらの氣稟としてもつて居るものもあるだらうが、しかしその多くは、苦患の道を経て初めて達し得らるゝところの、精神鍛鍊の餘の賜であるといつてよい。今、さういふ句を、芭蕉晩年の作中から拾ひ出してみると、

灌佛や皺手合する珠數の音

六月や峰に雲おくあらし山

夏の夜や崩れて明けしひやし物

道細し相撲取草の花の露

里ふりて柿の木もたぬ家もなし

水清くなつて柳の散る日かな

松風の軒をめぐりて秋暮れぬ

などである。一見極めて平凡であるが、その平凡は俗情を示唆するやうな平凡ではない。その奥には、深く澄み湛へた作者の心境が展けて居る。それは恰も蒼空のやうなもので、我々は多くの場合、それを忘れて居る日の方が多いが、時あつてそれに氣づくとき、しみじみ眺めないで

は居られぬやうな深みをもつて居るものである。

私は以上の句の中でも、特に『六月や』『里ふりて』『水清くなつて』の三句を、その代表的のものとして推したいと思ふのであるが、先づ『六月や』の句に就ていふと、若しこれが他の作者であつたならば、恐らくもつと、刻んで來ないとたんのうしなうところであらう。否、それより前に、さういふ景情は平凡なりとして、顧みずに済ませてしまふではなからうか。つぎに『里ふりて』の句は、一讀概念的に見えて、單に或る事象として叙べたといふに過ぎぬ觀はあるが、深く讀み味はつてみると、この句の暗指して居る背景は、感じの充實した擴がりをもつて居ることが肯けるであらう。最後に『水清くなつて』の句であるが、今これを天明の蕪村の

柳散り水濁れ石ところぐ

といふ句に比べて見る時、蕪村が音調上の興味に惹かれて居る間に、芭蕉はそれらに毫も累らちかはされずに、直ちに事象の核心に踏み込んで居ることを感ずるであらう。人によつては、この句を單に季節感を詠んだに過ぎぬと思ふものがあるかも知れぬが、私に言はずれば、その見方は、まだ淺いと評せざるを得ぬ。それは兎も角、芭蕉が晩年に以上のやうな句を残して居ることは、理の當然である。

つぎに、も一つの傾向といふのは、見方によつては、芭蕉をして他の俳人と區別せしめると

ころの特色となつて居る、その豊かな主觀味が、自然に打ち出て居るところにあるのである。この傾向は、芭蕉中期の作などにも既に存する訣であるが、殊に晩年の句に至つて、それが一層著るしくなり、一方、その以前の作などには見られぬやうな鋭さと深さを加へて來たのである。今、茲に、藝術上の主觀の意義を定義することは、私のよく任とするところではないが、これを、作者の人生觀乃至自然觀が、句の中に捉へられた事象を通じて、さながらに現はされて居ることだといへば、さう大して謬りであるまい。若しそれに思想的要素が優ウレドナシド勢となつて來れば、我々はこれを觀念と呼ぶのである。一體芭蕉の句は、何れかといへば、この觀念的味の多い方であつて、その墮落したものが、後世の所謂月並句となつたのであるが、しかし勝れた句に就ていへば、そこには芭蕉だけがもち得たといつてもいゝ程の豊かな主觀味が出て居るのである。今、さういふ句を、芭蕉晩年の作中から擧ぐれば、

一とせに一度つまるゝ薺かな

松杉をほめてや風のかをる音

菊の香や奈良には古き佛達

白菊の目に立てゝ見る塵もなし

この秋は何で年よる雲に鳥

## 此道や行く人なしに秋の暮

などがある。尤もこれらの句の示唆する味ひは、それぞれ異つたものではあるが、その底を貫流する主観に於ては、殆ど總てが共通して居る。たゞそれが一見異つたものゝやうに思はれるのは、その動き方が、場合々々に應じて特殊の方面を取つて居るからである。殊に最後の三句は終焉前の作であるが、この句に現はされた主観の鋭さは、中期の作などには求め得られぬところである。見る人によつては、實に危い境地を指して居るともいへるであらう。初めの句は白菊、つぎの句は雲に鳥、最後の句は秋の夕暮の道といふやうな、極めて單純な對象に即して渾然たる主観を出して居るのである。かゝる主観は或る程度まで、思想的の言葉を借りて説明出来ぬこともあるまいが、しかしその渾然たる味ひに至つては、畢竟、かゝる藝術的表現を俟たねば生きて來ぬものである。そこにこの句の尊さがある訣であつて、死を目前に控へた芭蕉の作としては、さもあるべきことゝ頷かれるのである。

これらの句に、更に情熱パッションをもたせたものは、大井川の川止めに遇つて詠んだところの、

五月雨の雲吹き落せ大井川

の句、及び病氣の爲め、芝柏亭の句筵に列することを得ずして詠んだところの、

秋深き隣は何をする人ぞ

の句、及び芭蕉臨終の句として知られて居る。

旅に病んでは夢は枯野をかけめぐる

の句などである。ただこれらの句に現はれて居る情熱は、火花のやうに瞬時に明滅するそれではなくて、深く湛へられた底力となつて、句のリズムをなして居るが爲め、慌はしい鑑賞者によつては、容易に看過されてしまふであらうかと思はれる。

さて以上で私の大體の考察は終つたが、この二つの著るしい傾向は、要するに芭蕉といふ一個の人格から生れたものである。たゞその異なるところは、事象に對する芭蕉の態度、換言すれば、より客觀的であるか、或は、より主觀的であるかによつて定まるのであつて、二者何れも眞である。そこに、我々短詩形藝術の創作に従ふものゝ、學ぶべき點があつたかと思つて、この稿を草した次第である。(大正十一年十二月)

# 芭蕉雜話

## 一 句數のハル

芭蕉の作句(姑く連俳を措いて)がどの位の數に上るかといふことは、多少とも芭蕉の藝術に愛好の念をもつて居る人の知りたく思ふところであらう。然るに芭蕉自身は、生前自らその俳句を蒐めるやうなことはしなかつたのであるから、その正確な數は固より分らう筈がない。世間で普通に『俳諧七部集』と呼んで居る『冬の日』『春の日』『曠野』『ひさし』『猿蓑』『炭依』『續猿蓑』の七撰集と雖も、『冬の日』を除いては、皆門人の選にかゝるものであるから、(尤も芭蕉歿後に出版された『續猿蓑』を除いては、芭蕉自身で校閲はして居るものゝ)後人が芭蕉句集を編む際には、諸書に散見して居る彼の句を蒐集するの勞を取らねばならなかつた訣である。今それらの句集中、比較的句數も多く、且つ編纂に忠實だといふ點から、一般に信憑されて居るものは、文政十一年版(芭蕉歿後百三十四年)の古學庵佛号、幻窓湖中共編の『俳諧一葉集』である。この集の編纂法は、句の排列順序を季題順にし、且つ『天和以前』(芭蕉四十

歳迄の作)『貞享以後』(四十一歳より臨終迄十一年間の作)及び『考證』(芭蕉の句と稱せられながら疑はしきもの)の三部門に分けて居る。今これを表にしてみると、

	天和以前	貞享以後	考證	總計
春	五七	二〇二		二七二
夏	三四	一〇三		二四七
秋	四九	二五三		三一七
冬	三八	一八一		二一九
無季				七
考證			一一	一一
(總計)	一七八	七三九	五九	一〇八三

  

所屬不明	春	夏
雜	三〇七	二七五
秋	三四六	二四七
冬	二二	二

即ち總數千八百三十三句となるのである。然るに昨年末沼波瓊音氏によつて編纂された『芭蕉全集』の類題別によると、その數は非常に殖えて居る。

即ち總數千八百八十七句となつて、實に百四句の殖え方である。

遮莫、芭蕉の句を眞に鑑賞しようとする人にとつては、その句境發展の跡(見方、捉へ方、現はし方などの變遷)を考へてみる必要がある。それにはどうしても句の製作年次に従つて考

察して行かねばならない。この點に於て、昨年、沼波氏の『芭蕉全集』、本年、荻原井泉水氏の『芭蕉俳句全録』が發刊されたことは、洵に有難い次第である。兩氏は、その編纂には多大の力を拂はれたことと察するが、今、それに従つて表を作つてみると、左の如くである。

年次	沼波氏	荻原氏
明曆三年	—	—
寬文四年	—	—
同 七年	—	—
同 十年	—	—
同 十二年	—	—
延寶二年	—	—
同 四年	—	—
同 五年	—	—
同 六年	—	—
同 七年	—	—
同 八年	—	—
同 九年	—	—
天和元年	—	—
同 二年	—	—
同 三年	—	—
寬元延寶	—	—
天和年中	—	—

これに依ると、兩氏の採録句數には約百句程の出入があるが、何れにしても、芭蕉の句で今日現存して居るものは、千百句より千二百句までの間と見れば間違ひないやうである。(因みに沼波氏の類題別が千百九十七句となり、その年代別が、それよりずつと殖えて千二百十句とな

年次	沼波氏	荻原氏
天和四年	六〇	三九
貞享元年	三八	二四
同 二年	三八	一七
同 三年	四八	五四
同 四年	六六	九六
同 五年	一一〇	一一二
元祿元年	一三八	五三
同 二年	一三八	五三
同 三年	六三	八二
同 四年	一三一	四〇
同 五年	五三	三八
同 六年	五〇	七六
同 七年	八三	二九
年代不知	一四六	一六三
元祿年間	—	二九
天和以前	—	一六三
貞享以後	—	二九
(總計)	一一一〇	一一一四

つて居るのは、一寸をかく思はれるが、それは、同じ句にして兩年に編入されて居るものがあるからであらう。現に私の氣がついたものでも五句程ある。

さて以上のやうな句数の計算は、事甚だ無益に似て、實はさうでない。といふのは、私もこの計算をして見る前には、詩聖とまで言はるゝ芭蕉のことだから、少なくとも二千や三千の句は残して居ることだらうと考へて居た。(今にして思へば、何といふ嘘ふべき臆測だつたらう。)然るに實際に就て見ると、その作句数は、千の上をあまり出て居ないのである。更に委しく言へば、彼の句作が圓熟の境に嚮つて來たと見らるゝ貞享元年より、終焉の元祿七年まで(年齢にしていへば、四十一歳より五十一歳迄)十一年間の作句数は、沼波氏に従へば八百五十句、荻原氏に従へば八百九十六句であるから、今これを十一年に平均してみると、一年の作句數約八十句前後となる訣である。固より芭蕉と雖も、これ以上多く作つたに相違なからうけれども彼は撰集校閲の際、自ら進んでそれを棄てたか、若しくは門人等に示さずして固く秘しておいたかの何れかであらう。かう考へて來る時、現代の歌人(俳人に就ては私は殆ど關り知らぬから何とも言へぬが)は、あまりに多く作りすぎる、否あまりに多く世に示し過ぎるといふ感なきを得ない。しかしそれは人さまざまの氣質によることである。それ故私は、芭蕉はかうであつたから、現代の歌人も當にかくあるべしなどといふ非論理的の言を發することは慎みたいが

たゞこの一事に徴しても、芭蕉が平生その句作をおろそかにしなかつたことだけは斷言しても差支へないやうに思ふ。そしてこの點に、我々は芭蕉に學ぶべき多くのものがないかどうかを反省してみたいのである。

## 二 前書の句

芭蕉の句を読んでつくづく感ずることは、その前書のついて居る句は、前書と併せ鑑賞することを忘れてはならぬといふ一事である。私は日頃から、短歌に於ける詞書は、これを重要視せなければならぬといふ意見を抱いて居るものだが、芭蕉の句に於ても、略々これと同じことが言へるのを、甚だ興味深き現象だと考へて居る。これは一つは、短詩形の藝術にあつては、出来るだけ記述脈を避けなければならぬといふ自然の約束に基づくからのことで、芭蕉もそのことは冥々裡に意識して居たやうである。(尤も芭蕉の句の前書にも、後人の手に成つたものがあるらしい故、一概にさうと斷定し兼ね訣であるか)

今、その一例を擧げてみると、かの有名な

道のべの木樞に馬に喰はれけり

といふ句は、後世の月竝者流によつて、「出る杭は打たれる」といふ意を寓したものと如く釋さ

れて居るのであるが、實はこの句は『野ざらし紀行』中にあつて、『馬上の吟』といふ前書がついて居るものである。これによる時は、この句は、旅人としての芭蕉の深い哀感を抒べて居るものなることが明かになり、従つて前書がない時よりも、句の味ひが一層こまやかになつて來る次第である。(委しいことは近く出版になる『芭蕉俳句新釋』を参照していただきたい。)また、

行く春を近江の人と惜しみける

といふ句は、芭蕉がこれを作つた當時、弟子の江左尙白に示したところ、尙白は、『近江』は『丹波』と變へても毫も差支へなからうから、一句としてはまだ安定を缺いて居るものだと非難したのである。それで作者の芭蕉も多少不安心に感じたものと見え(?)更に弟子の向井去來に示すと、去來は、『暮春もし丹波に在さば固よりこの趣向浮ぶまじ。歳暮又た近江に在さば固より此感なかるべし。風流はその場にあるもの』だと評したので、芭蕉も衷心嬉しく感じて『去來汝は風雅を語るべきものなり』と大に賞讃したといふ話である。この去來の評は、たしかに芭蕉の句作動機をよく穿つて居るものだが、しかしこの句を、その當時の芭蕉の生活状態を考へる中に入れないで鑑賞する時には、尙白の非難必ずしも卻くべきでないと思へる。事實、その爲めばかりでもなからうが、芭蕉は後になつて、この句に『望湖水惜春』といふ前書を附け

たといふことで、現在は、どの句集を見ても、この前書がついて居る訣である。これなども、芭蕉の句を鑑賞するに當つては、その前書を閑却してはならぬといふ事實を最も雄辯に語つて居るものである。

さてかういふことを一々例を擧げて書いて行くと際限がないから、その委しいことは、芭蕉の句に就いて實地に肯づいて貰ふより外はないが、また他方に於て、前書をあまりに重要視するところから來る危険をも、この際、併せて注意しておきたいとおもふ。例へば元祿三年の作やがて死ぬけしきは見えす蟬の聲

といふ句には、『無常迅速』といふ前書がついて居るのであるが、この前書は、現在より見れば、寧ろなくもがなと思はれるものである。この句は恐らく芭蕉が蟬の鳴き聲の旺んな様に感を發して詠んだものであらうが、芭蕉は後でどう思つたものか、『無常迅速』などといふ著しく觀念的の臭味ある前書をつけたのだといふことは、これを察するに難くない。(尤もその當時の俳壇にあつては、かういふ道樂趣味は一半の趨勢だつたのである。)固より私は、この句を除き藝術的價值のないものだと思つて居るものであるから、この前書の有無は、さして問題にして居ないのであるが、しかし一步を譲つて、前書が有る方がよいか、それとも無い方がよいかと言ふ段になると、寧ろない方が、この句に好感をもてるといふことだけは、言つてよいとお

もふ。また元祿四年の作で、『坐右銘、人の短をいふこと勿れ、己が長をいふこと勿れ』といふ前書のついた有名な句

ものいへば唇さむし秋の風

なども、これと同列におかるべきものである。かう見て來ると、いかにも最良の引倒しらしく聞えて、自分ながら少々くすぐつたく感じない訣でもないが、しかし芭蕉の句作動機を靜かに考へて見る時は、これらの藝術的價值に乏しい句でさへが、實は實感を基として詠んだものであつて、前書は寧ろ、その當時の悪い道樂趣味の致すところだと考へる方が、自然のやうである。これが芭蕉の句の前書の重要視を主張しつゝある私が、他方に於て、前書にあまりに囚はれ過ぎることの危険を注意したく思ふ所以である。

### 三 鑑賞態度のこと

これは私一己の懺悔である。

實をいへば私は、過去三年餘に亘つてかなり全力を傾注してやつて來た芭蕉の句の評釋を、今度一纏めにして、『芭蕉俳句新釋』の名で出版することになつたが、今茲で、その間に於ける私の鑑賞心理？の推移を簡單ながら述べて、大方諸君の批評を仰ぎたく思ふ。

私は當初の計劃では、甚だ烏滸がましい言分であるが、純粹なる藝術批評態度に立つて、芭蕉の句を見て行かうと試みた。そしてこの態度は、微弱ながらも前後まで貫ぬき通したつもりであるが、しかし漸次に一々句が生まれて來た背景を知り、またその句が芭蕉の作中に於て如何なる位置を占むべきものなるかを知るに至つて、當初には思ひも掛けなかつた興味を覺えるやうになつた。熟々思ふに一人の作品を鑑賞する場合には、その人の生活乃至その心境發展の跡を索めることは、たしかに重大な意義をもつものではあるが、しかし一個の作品の純粹批評に當つては、これは必ずしも常に要求せらるべき資格ではない、私は從來の批評家にしてこの間の矛盾に頓かざりしもの、果して幾人ぞや、と言ひたい位である。こゝが所謂研究態度と批評態度との相岐るところであつて、よほどの多力者に非ざる限り、この二つの態度をよく調和して行くことはむづかしいのである。私の當初の出發點は、先にも述べた如く、純粹批評態度にあつたのであるが——そしてこの態度は決して間違つて居ないと信ずるものであるが——何時からとも知らず、それに研究態度の色彩がかなり濃密に加はつて來たことは否定出來ない事實である。尤もこの研究態度の混入は、強ち排すべきものでないかも知れぬ。たゞ茲に恐るべきは、その態度が動もすると、興味中心のものに陥り易い弊を伴ふことである。私が芭蕉の句の評釋に當つて、常に恐れたのも、この點であつた。(大正十一年九月、短歌雜誌)



## 芭蕉の句の「ねまる」語義考

私は本誌(短歌雜誌)九月號で、芭蕉の「涼しさをわが宿にしてねまるなり」の句を評して「ねまるは「ことばのいづみ」に據ると北越地方の方言で寝ると同意だとある。羽前あたりでもさう用ゐて居るかも知れぬ。若しさうだとすれば芭蕉は態と方言を用ゐてこの句を作つた訣である。」と書いておいた。然るにこの間、歌談會の席上で尾山篤二郎君はそのことを言ひ出して、「ねまる」は「坐る」の意である。同君の生れた金澤地方では、來客に、氣を寛ろけてお坐りなさいといふ意を述べる時に、専らねまりなさいといふ言葉を遣ふ由に言はれた。また西村陽吉君もその際、このねまるといふ語が長唄の「越後獅子」の中に出て居ることを注意された。それで私は、ねまるの語に對する自分の解釋が少なくも不穩當であつたことだけは知つた訣だが、それにしても芭蕉のこの句は、ねまるを坐ると同意に取つたのでは、よく解釋されない。第二句が「わが宿にして」とあるのだから、坐るの意では、それに相應する氣持が現はれぬ訣である。かう思つて「言海」を引いて見たら、矢張り寝るの方言だといつてある。この點に於

ても「言海」はまだ不親切だといふ氣がした。

然るにその後二三日経て、同じく歌談會に出席された古泉千樫君から、次のやうな丁寧な手紙を貰つた。後で聽く所によれば、同君はそれを驗べるために、同君の近所に居る越後乃至羽前出身の人々を手を盡して訊ね廻られたさうである。私はこゝにもまた、同君一流の研究癖(悪い意味でなく)あることを微笑ましく思ひ、併せて同君の厚意を謝する次第である。今左にその全文を掲載する。

先日は失禮致し候。「ねまる」のこと、大日本國語辭典(松井簡治氏編)を見るに左の如し。

「ねまる」(自動四)(一)すわる。居る。日向、北陸道、奥羽、加賀、相模及び下野邊の方

言。(物類稱呼)運歩色葉「居(ネマル)」物類稱呼五「古歌、しかもかれはあかしや庭のきりくす同じ所にねまりてぞ鳴く」(二)うづくまる。はらばふ。(三)寝る。東海道名所記「

山かがちのねまり申したるよな」奥の細道「涼しさをわが宿にしてねまるなり」川中島合戦「なぜ船にねまらないと、北國訛のり版行額」(四)平伏す。ひれふす。手をつく。遠江

國濱松の方言。心中宵庚申上「是非所望申した。是れ軍右衛門がねまり申して手をつかへる、こりやさ」それから西村君も一寸言はれましたが、長唄の越後獅子に「そのおけさにいなこと言はれ、ねまりねまらず待ち明かす、ござれ話しませうぞ、こん小松の蔭で、松の

葉のよにこんこまやかに」といふ文句あり。此文句は寝ることに解しても、立つたり居たりと解しても通ずるが、その前に『田舎訛りの片言交り』などの句あるを見れば、作者杵屋文左衛門は、この方言の意味を知つて居たらしいのです。そして越後地方では『坐る』方にいふのが普通にて、寝ることはぬまるといはざる由。柏崎に『ねまり地蔵』といふ地蔵あり。坐像の由。越後の盆踊歌に『ねまりお地蔵に立ちお地蔵、佛のざいして魚のぼうざうはやめしやんせ』又『柏崎はねまりお地蔵に立ちお地蔵、お地蔵お地蔵に似やはぬ。さかなのあきなひやめなされ、やめなされお地蔵、お地蔵に似合はぬさかなのあきなひやめなされ』などあります。又、同地方俗謡に『ねまれく〜とおいやるけれど、ねまりや戀しいさま見えぬ』といふ句あり。これもしやがむ、坐るなどの意なるべし。御参考まで。

以上に就ては古泉君にも意見があるさうであるが、今迄まだ伺ふ機會のないのを残念に思つて居る。それはそれとして、『ねまる』の語義には、『寝る』といふ意のあることもこれで確められた。それ故、芭蕉の句に對する私の解釋は、全然間違ひであつたとは言はれない。これはその後、齊藤茂吉氏送別會を兼ねての歌話會席上で古泉君も言はれて居たと記憶するが、『ねまる』には、『寝る』眠るためにといふ意外に、身體を休める爲めにゴロリと横になる、乃至眩枕をしてまどろむといふ位の、かなり細い味ひがこもつて居るのではなからうかといふことに

氣がついた。若しさうだとすれば、芭蕉の句は、その意味にとつて間然する所なく解釋されて來るのである。芭蕉の句は、九月號でも述べておいた通り、羽前の尾花澤で作つたものであるから、陸前羽前地方に現存の残つて居るねまるの語義を訊せば訣なく了解されるだらうと思ふが、假令、同地方で現在『寝轉ぶ』の意に用ゐて居ないにしても、言葉には進化といふことがあるのだから、確かな文献がない以上、芭蕉時代に『寝轉ぶ』の意で使つて居なかつたとは斷言出來ない。さういふ訣で、今のところ。私は獨りぎめで、芭蕉の句の『ねまる』は、先に解釋した如く、『寝る』でもなく、尾山君説の如く『坐る』でもなく、ゴロリと横になつて寛ろぐ位の意味で解釋して居る次第である。

然らば、『ねまる』の語源は何處にあるか？これは語義以上にむづかしい問題である。歌話會の席上で、太田水穂氏は、『ねまがる』（寝曲る）の轉訛で、身體を曲げて寝るといふ意に解釋せられて居る由を語られたが、私にはまだ首肯出來兼ねる。私の何時もの癖の臆説では、『ねまろぶ』（寝轉ぶ）の轉訛でないかと竊かに思つて居る。『ろ』と『る』とは、行に屬する音であるから、かゝる轉訛は極めて自然だと言つてよい。

序でながら、芭蕉がこの句を作つた動機に就て一言述べておきたい。この句は、芭蕉が羽前尾花澤の清風の許を尋ねて作つたことは、既に九月號でも述べておいたが、今、三宅木仙氏著

「註釋奥の細道」(明治三十六年版)を見ると、

句意は、清風の許に宿りて、其家の構造など風流なるが上に、尙懇切にいたはりくれたれば、長途の苦みも爲めに打忘れ、此家の涼しさを我ものにして寝るといひたるなり。又、主人の名の清風といへるより、涼さとよみたりと見てよろしからん。

とある。この解釋は、恐らく三宅氏の獨創ではなく、菅菰抄(奥の細道の註釋者で一番古いもの)あたりから行はれて居た説であらうと思はれる。私のやうに、出来るだけ句の正面からはひつて、故實的穿鑿に餘り重きをおかぬ鑑賞者にとつては、かういふ問題はいつでもよいやうなもの、飽く迄研究的態度で始終する人には、こゝまで立ち入つて考へる必要は十分ある。そして實際に、芭蕉自身も、他でよくかういふことをやつて居るのである。例へば、少し趣は違ふが、

牡丹蓋深く分け出る蜂の名残かな

の句では、蜂を自身に、牡丹を自分が長く逗留して尾張の門人桐葉子に喩へた如き、また、

水鶏啼くと人のいへばや佐谷泊り

の句で、水鶏を芭蕉の一行が一夜の宿を求めた隱士山田氏に喩へた如き、それである。それ故「涼しさ」を「清風」から暗示をうけたと見るのも強ち氣儘な臆測であるとは言はれない。この

事に就ては、古泉君からも注意をうけたから、一言書き止めておく次第である。

終りに臨んで、以上書いたことに就き、一般讀者諸君、特に陸前羽前あたりの讀者諸君から御教示を賜はらば幸である。(大正十二年一月、短歌雜誌)

### 右 補遺

前文を「短歌雜誌」に發表した後、私は、山形の菊池利吉君から、次のやうな手紙を寄せられたので、現在では、「ねまる」の語義に就ては、殆ど間然するところないといふ迄に明かになつた。分つてみれば「ナンノコッタ」位で済むだらうが、これが印刷術の幼稚で交通の不便な昔であつたと假定すれば、容易な訣ではないのである。尤もこれだけ分る迄には、「アララギ」の古泉千樞君や其他の人々を煩はした訣なので、茲に改めて、以上の諸君に對して謝意を表する次第である。

左に菊池利吉君の手紙を抄出する。

「短歌雜誌」二月號を見て、すぐ手紙を上げようと思ひましたが、尾花澤の人に聞いてからと思ひ、今日迄延引しました。(中略)現在尾花澤で使用してゐる「ねまる」は「坐る」「くつ

ろぐ」等といふ意で、「ひざまるてゐては、やちやかない、ねまらつしやい」、は「膝を正して坐つて居ては我慢出来ない。あぐらをかきなさい」といふ方言なさうです。私の邊でもかなり使ひますが、やはり「寝る」といふ意でなく、「うづくまる」「はらばふ」程度で使われて居ます。蜻蛉が草の上に止まつたりしたのを、「ねまつた」と言つて居ます。活動寫真を見る時など、「此の野郎、貴様の頭で見えない、ねまれく」と言ひます。これも矢張り、「うづくまれ」と似たものだと思ひます。多くは「はらばふ」よりも「うづくまる」といふ方に當つて居る様に思はれます。唯、田の畔にはらばつたのなどは、「ねまつた」と言はないやうです。然るに、少し頭の方をあけて身體を少し斜め加減にして何か見たりすると「ねまつて何見つた？」と言ふのです。また人に見せたいやうな面白いものがあつたりすると、「早くねまれ、こんなおもせいのものがあんぜア」といひ、遊び盛りの子供等が兵隊ごっこする場などには、「ほら見つけられつと、われから、こさ、はやくねまれす」といひます。前者の意は「早くねまれ、非常に面白いものがある」後者の意は、「そら、見つけられると悪いから、此處に早くうづくまれ」といふのです。かういふことに明るい人々にも、かなり聞いてみましたが、蜻蛉が休んだりするは別として、人がねまるといふのは、どうしても、うづくまるといふ意に用ゐられるさうです。(下略)

以上、菊池氏の手紙で十分明かになつたが、「ねまる」とは、或る一部の俳人が考へて居た如く「ねる」の意でもなく、また尾山君のいふ如く、「坐る」の意でもなく、その中間の「うづくまる」「はらばふ」位の總稱で、私が「ねまるぶ」が、その語源ではないかと考へたのは、必ずしも誣妄でなかつたことが、明瞭になつた訣である。(大正十一年四月、國民文學)

大正十二年十二月十五日印刷  
大正十三年一月廿二日出版

定價金貳圓參拾錢

著者 半田良平

發行者 前田隆一

東京市日本橋區元大工町一番地

印刷者 武居菊藏

東京市本郷區眞砂町三十六番地

發行所

東京市日本橋區元大工町一番地  
振替東京三三一六番

紅玉堂書店

紅玉堂書店出版書目

詳細なる出版目録は御申  
越次第即時送呈申上候

著者 書名 定價 送料

松村英一	現代短歌用語辭典	一、二〇	〇六
橋本墨花	花と花言葉	一、八〇	〇六
松村英一	現代一萬歌集	二、三〇	〇八
半田良平	最新旅行歌選 <small>名所めぐり</small>	一、五〇	〇八
窪田空穂	歌集鳥聲集	一、三〇	〇八
植松壽樹	歌集庭燎集	一、二〇	〇二
尾山篤二郎	歌はかうして作る	一、五〇	〇二
半田良平	芭蕉俳句新釋	三、七〇	〇二
浦瀬百雨	現代英米詩選	一、五〇	〇六

勝田香月	詩集哀別	一、二〇	〇六
勝田香月	抒情さびしき人々へ <small>詩集</small>	一、二〇	〇六
新島榮治	詩集湿地の火	一、三〇	〇六
田山花袋	黒猫望影	一、八〇	〇二
前田晁	遠望影	一、八〇	〇二
正宗白鳥	光と影	一、八〇	〇二
辻村伊助	アルプススイス日記 <small>登山記</small>	四、五〇	〇二
前田晁	新しい文章の作り方と味 <small>増補三版</small>	一、五〇	〇一
日本雄辯學協會	新らしい演説の仕方と標準的辯護集	一、八〇	〇一
東京寫眞同好會	誰にも寫眞のうつつ方 <small>すぐ解る</small>	二、三〇	〇一

黒田 佐吉

シヤロツク  
ホルムス

深紅の一絲

一、五〇

、〇八

武田 玉秋

ス・エストル・アラン  
トマン

犯罪王對探偵王

一、八〇

、〇八

同

フアントマ

謎の死美人

一、八〇

、〇八

若目田 三郎

ル・キユイ  
原著

怪奇探偵奇怪な指環

一、五〇

、〇八

新居 光三

ル・キユイ  
原著

怪奇探偵邪惡の家

一、〇〇

、〇六

新居 光三

マツケンチ  
原著

怪奇探偵聞かぬ扉

一、〇〇

、〇六

同

探偵奇書

顔と顔

一、〇〇

、〇六

宮居 劔三

リュウ・アライ  
原著

戀愛探偵愁の孔雀

一、五〇

、〇八





終